

異文化の諸相

No. 34 2013



日本英語文化学会

目次

言語研究の要素を導入した大学英語教育 中井延美	5
The Machiavellian Hero Henry V 亦部美希	19
<i>Paradise Lost</i> と Space Trilogy —— <i>Out of the Silent Planet</i> における「沈黙」の考察 伊藤 佐智子	37
幕が上がるまで ——イザベラにみる『幕間』という過渡期の女性像 西野方子	51
学会会則	63
学会賞・新人賞内規	67
投稿規定	69
編集後記	

言語研究の要素を導入した大学英語教育

中井延美

1. はじめに

大学生や大学進学希望者から、「英語は苦手だが、話せるようになりたい」、「高校の英語の成績はあまり良くなかったが、英語は好きだ」などという声を聞くことが多い。その中には、大学で TOEIC[®]等の英語資格試験のための勉強がしたいと意欲的に語る者も少なくない。そのような資格試験が大学の入学者選抜で活用されたり、入学後の教育プログラムの一部に（来る就職活動も視野に入れて）組み込まれたりする昨今の傾向と相まってのことである。資格取得を目標に据えることは、“ある種の学習”への動機付けになる。結果がスコアで数値化される試験であれば、“ある種の技能”の伸びを測るスケールにもなる。仮に、中学英語レベルの語彙や文法の習得が明らかに不十分であり、入学当初の TOEIC スコアが 300 点ほどの大学生 A さんがいるとしよう。そのような A さんであっても、目標意識をもって然るべき学習を続ければ 1 年以内に同スコアを 500 点以上に上げることは十分可能であり、指導面においてもそれほど難しいことではない。難しいのは、資格取得に特化された技能学習とは別に、もっと広い視野で英語を学ぶことへの意識の誘導である。本稿は、学習者が将来さまざまな形で英語を使用するための「土台」となり得る要素を大学英語教育で習得させることが肝要である、と主張する。加えて、その土台づくりへのアプローチとして、大学生（であっても初級英語学習者）に対する英語教育のなかに、言語研究のいくつかのレベル（名詞句、文、形式、意味、解釈など）に関連させて導入し得る要素を、具体例として提示する。

2. 教育現場の事例とその背景

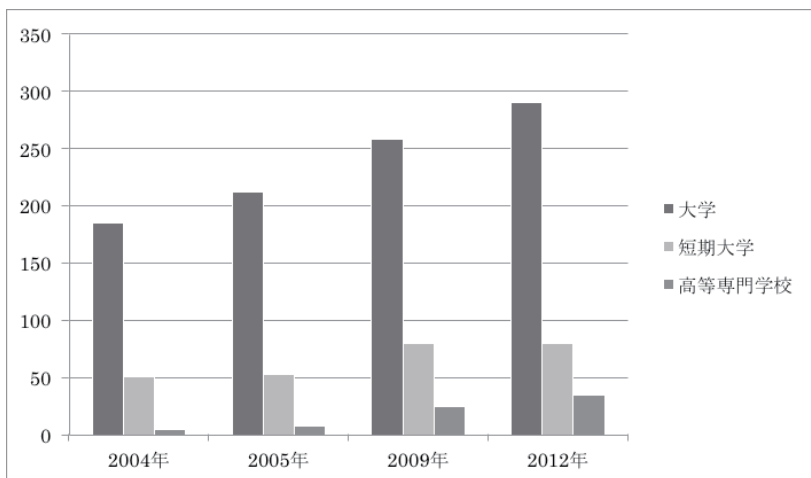
本節では、まず、英語資格試験の中で TOEIC を取り上げ、大学の入学試験や単位認定における活用状況と推移を示す。次に、文部科学省が 2002 年に「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」を公表して 10 年が経過した時点で同省が通知した大学入学者選抜要項に示された方針等にお

る、英語資格試験に関わる記載を抜粋して提示する。さらに、教育現場から、首都圏にある X 大学（仮称）が教育システムのなかに英語資格試験の結果に基づいた優遇・支援制度や進級条件を積極的に組み入れている事例を紹介する。

大学の入学試験・単位認定において TOEIC テストが活用される状況は年々増える傾向にある。グラフ 1・2 は、国際ビジネスコミュニケーション協会が 2004 年、2005 年、2009 年、2012 年に行った独自調査¹の結果に基づいて筆者が作成したものである。グラフ 1 は入学試験において、グラフ 2 は単位認定において TOEIC テストの結果を活用していると回答した大学・短期大学・高等専門学校の数を示している。入学試験・単位認定のいずれについても、大学での活用状況の伸びが顕著である。

グラフ 1. TOEIC[®]テスト 入学試験における活用状況

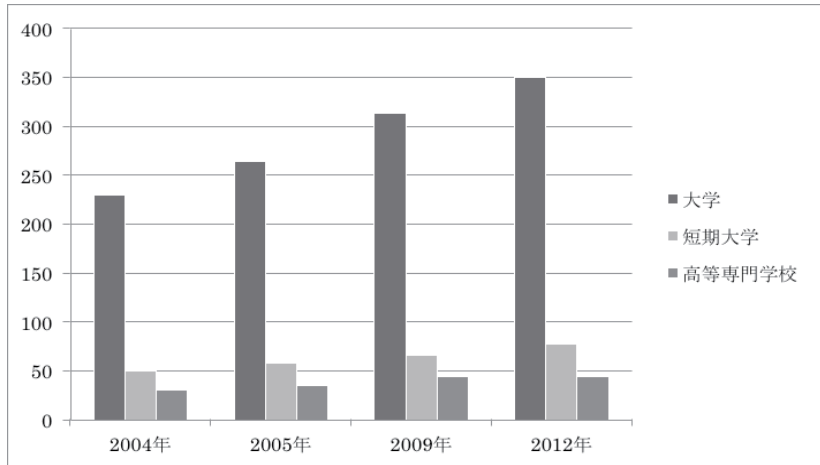
——大学・短期大学・高等専門学校——



(データ：国際ビジネスコミュニケーション協会)

グラフ 2. TOEIC®テスト 単位認定における活用状況

——大学・短期大学・高等専門学校——



(データ：国際ビジネスコミュニケーション協会)

2012年5月に文部科学副大臣から通知された「平成25年度大学入学者選抜実施要項」(文部科学省 2013)では、「基本方針」の一部に、「……入学後の教育との関連を十分に踏まえた上で、入試方法の多様化、評価尺度の多元化に努める」と記されている。また、「学力検査等」については、「……必要に応じて信頼性の高い外部試験等の活用を図ることが望ましい」として、「入学志願者の外国語におけるコミュニケーション能力を適切に評価する観点から、実用英語技能検定試験(英検)やTOEFL等の結果を活用する」という記載がある。加えて、「入学者選抜において活用されている外部試験等の例」として、「語学関係(英語)」では、実用英語検定、TOEFL、TOEIC、IELTSをはじめ、英語資格試験の名称が多数並ぶ。

X大学では、入学合格者を対象に、入学前に実用英語技能検定2級またはTOEIC550点以上取得をしている場合には、入学年度の授業料を半額免除に、或いは、入学前に実用英語技能検定準1級以上またはTOEIC720点以上を取得している場合には、入学年度の授業料を全額免除にするといった優遇措置を講じている。また、同大学では、入学後の資格取得を奨励するために、表1にあるような等級付けによって奨学金を給付するシステムを導入している。

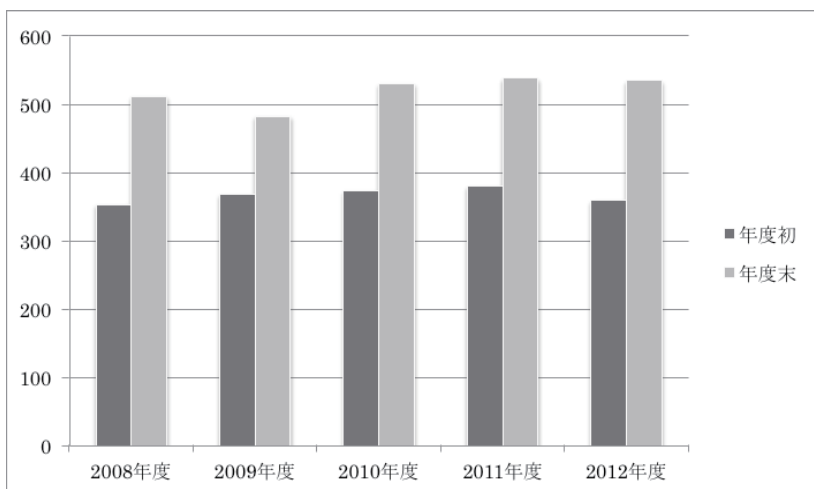
表 1. 資格等取得奨励奨学金の事例 (X 大学)

	100,000 円	70,000 円	50,000 円	30,000 円
TOEFL (iBT)	83~	71~82	61~70	52~60
TOEIC	780~	720~775	650~715	550~645
実用英語技能検定 (英検)	1 級	準 1 級		2 級

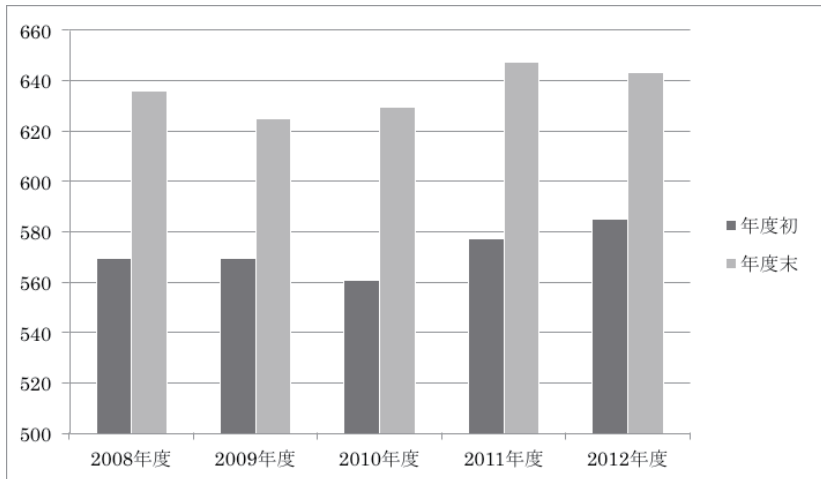
大学の単位認定における TOEIC スコアに基づいた優遇措置のなかには、然るべきスコアの取得を進級の絶対条件とする事例もある。X 大学の Y 学部（仮称）では、TOEIC で 500 点以上のスコアを取得することが 1 年次から 2 年次への進級要件であり、600 点以上のスコアを取得することが 2 年次から 3 年次への進級要件である。同学部では、学生が目標スコアを取得するまでに TOEIC を年間（公開テストと IP テスト²を合わせて）十数回受験することも珍しくない。

グラフ 3・4 は、そのような状況下に置かれた Y 学部の 1、2 年生が、2008 年度から 2012 年度までの各年度初に取得した TOEIC スコアの平均と、各年度末までに取得したベストスコアの平均を、それぞれ示したものである。年度ごとの伸びを数値上でみると、1 年次では平均して 153 点、2 年次では平均して 64 点上がっている。

グラフ 3. 大学 1 年生の TOEIC スコア取得状況 (X 大学 Y 学部)



グラフ 4. 大学 2 年生の TOEIC スコア取得状況 (X 大学 Y 学部)

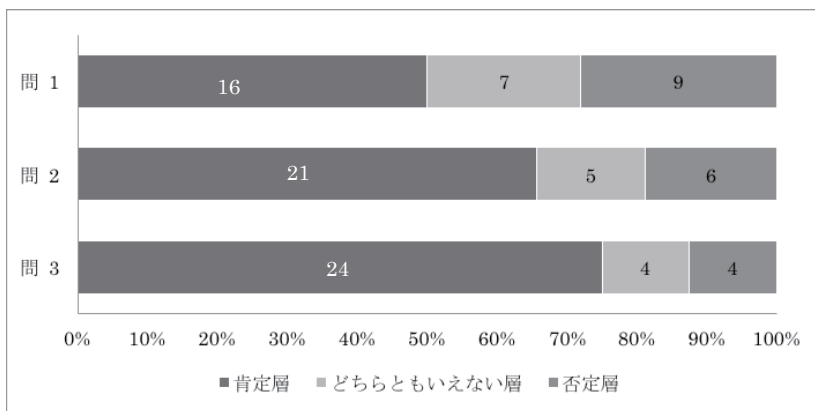


3. 「英語」についてのアンケート調査

前述の X 大学 Y 学部の 2 年生 32 名を対象に、2013 年 7 月、「英語」についてのアンケート調査を実施した。被験者は、1 年次に TOEIC で 500 点以上のスコアを取得して 2 年次に進級し、さらに 600 点以上を取得することで 3 年次への進級を目指す者ばかりである³。同アンケートは、以下 (1) の 3 つの質問文で構成されており、「どちらともいえない」を「3」とする「1～5」の五段階で回答してもらった。たとえば、問 2 の質問の場合、回答選択肢は「1. とても好きだ」「2. まあ好きだ」「3. どちらともいえない」「4. あまり好きでない」「5. まったく好きでない」となる。結果は、1 と 2 を併せた「肯定層」、3 を「どちらともいえない層」、4 と 5 を併せた「否定層」として集計した (グラフ 5 参照)。さらに、各質問について、その回答を選んだ理由を具体的に記入してもらった。

- (1) 問 1. あなたは、大学に入学する以前、「英語」が好きでしたか。
 問 2. それでは、今現在、あなたは「英語」が好きですか。
 問 3. あなたは、3 年次への進級条件である TOEIC600 点以上を取得したあとも、積極的に TOEIC を受験したいと思いますか。

グラフ 5. 「英語」についてのアンケート調査の結果



グラフ 5 が示すように、問 1 の《大学に入学する以前、「英語」が好きだったか》という質問については、「とても好きだった」(n=3)と「まあ好きだった」(n=13)を併せた肯定層が 50% (n=16) を占め、「あまり好きでなかった」(n=8)と「まったく好きでなかった」(n=1)を併せた否定層が 28% (n=9) を占めた。

まず、前述の問 1 の肯定層 16 名のうち、問 2 の《今現在、「英語」が好きか》という質問については、否定層は皆無で、「とても好きだ」(n=2)と「まあ好きだ」(n=12)を併せた肯定層が 87.5% を占め、どちらともいえない層 (12.5%、n=2) を大きく上回った。次に、前述の問 1 の否定層 9 名のうち、問 2 の《今現在、「英語」が好きか》という質問については、肯定層、どちらともいえない層、否定層に 3 名ずつ三分された。

さらに、問 1 の肯定層 (16 名) のうち、問 2 で「どちらともいえない」を選んだ 2 名は、「大学に入学し、TOEIC のスコアという進級条件があり、TOEIC の勉強ばかりしなくてはいけないから」「TOEIC の進級条件というプレッシャーがあり、たまに嫌になるときもある」という理由を挙げた。

一方、問 1 の肯定層 (16 名) のうち、問 2 でも肯定層に該当した 14 名からは、たとえば、「ずっと TOEIC について学んでいるがあきない。やっけていて嫌ではないので」「好きではあるが、できるわけでもないし、得意でもない。文法は嫌い」「TOEIC のおかげでボキャブラリーが増え、より多くの英語が理解できるようになったから」というような理由が挙げられた。

反対に、問 1 の否定層 (大学に入学する以前、「英語」が好きでなかった)

に該当した9名について、問2でも否定層（1年次にTOEICで500点以上のスコアを取得して2年生になった時点で、「英語」が好きでない）に該当した3名からは、「頑張って勉強しても、点数が上がらない」「TOEICがわからなくて嫌い」「才能がない」という理由が挙げられた。

問1の同否定層（9名）のうち、問2でどちらともいえない層（1年次にTOEICで500点以上のスコアを取得して2年生になった時点で、「英語」が好きだとも、好きでないとも言えない）に該当した3名からは、「（現在の勉強には）TOEICのことがあるから、何か違う」「文法が難しく、まだ好きだと言えない」などの理由が挙げられた。

問1の同否定層（9名）のうち、問2で肯定層（1年次にTOEICで500点以上のスコアを取得して2年生になった時点で、「英語」が好きだ）に該当した3名からは、「（TOEICで）ある程度、文が読めるようになってきたし、大まかな内容も理解できるようになったから」「海外で英語を話せたら楽しいだろうと思うから」「文法やTOEICになると嫌なこともあるが、ネイティブ・スピーカーと会話が弾むと勉強してきて良かったと思うから」という理由が挙げられた。

加えて、問3の《3年次への進級条件であるTOEIC600点以上を取得したあとも、積極的にTOEICを受験したいと思うか》という質問については、「とてもそう思う」(n=9)と「ややそう思う」(n=15)を併せた肯定層が75%(n=24)を占めた。その理由としては、「もっと高いスコアを目指したいから」(n=9)、「就職活動や社会に出てからのためになるから」(n=9)、「英語の勉強は無駄にはならないから」(n=3)などが挙げられた。一部には、資格等取得奨励奨学金の対象となるスコアまで取りたいという言外の理由が推測できるものも含まれていた。

4. 大学英语教育の目標が数値化されることの問題点

前掲の「英語」についてのアンケートの結果から、大学英语教育の目標が数値化されることの問題点が、少なくとも(2)に挙げるような傾向として見えてきた。

(2) a. 文法が苦手（嫌い）である。

b. TOEICの点数が高ければそれでいい、という得点至上主義に陥って

いる。

- c. TOEIC スコアが伸びたことによって、具体的に英語で何かができる能力がついた、という実感が伴っていない。
- d. TOEIC スコアが下がると不安だ、といった妙な価値観をもってしまう。
- e. TOEIC スコアを上げなければならないと考えると、追い込まれて英語の勉強が楽しくなくなる。
- f. 英語の勉強は TOEIC で結果を出すために行うものだと考えている。
- g. TOEIC が英語力の伸びを測る手段ではなく、学習のゴールになっている。

言語研究者のなかには、大学の英語教育システムに外部資格試験が組み込まれる方向性に警鐘を鳴らす人たちも少なくない（たとえば、大津・江利川・斎藤・鳥飼 2013）。TOEIC や TOEFL のスコアによって特定学年や卒業時までの到達目標を明示するという、昨今の大学英語教育における傾向について、大津（2009: 26）は、「これらのテストによって計測される英語力が大学英語教育の目的に照らして、どのような意味を持つかを慎重に検討することなしに、単にこれらのテストのスコア向上だけを指すという短絡的な目標を設定するだけでは、スコア向上のための方略学習に終わってしまう可能性が高いと危惧している」と述べている。また、安井（2012: 22）は、学習者の英語運用能力を測る尺度（スケール）としての TOEIC の機能について、「英語力がしっかり身につけている人が、TOEIC を受ければ、高い得点を上げることができるが、その逆は真ではない。すなわち、TOEIC で高得点を上げると、その人は高い英語力が身につけているといえるかということ、そうとは限らない」と指摘している。

TOEIC スコアが算出されるには、公開テストの実施後、受験者の各設問への解答データをもとに、問題ごとの難易度の確認や、問題作成者の意図に沿った形で受験者のレベルを弁別できているか、性別などの違いで有利・不利が発生していないか、などの確認が行われる。そして、最終的に素点（正答率）から受験母集団のレベルや問題の難易度に左右されない標準化されたスコアへ換算される。また、TOEIC では、受験者のスコアが正規分布することを前提にすると、標準偏差（S.D.）がセクション（リスニング／リーディング）別で± 25 点、トータルスコアで± 35 点になる。言い換えると、個々

のトータルスコアは標準偏差（± 35 点、すなわち 70 点の幅）を含んだ「範囲」として見る必要がある。

筆者は、冒頭で、入学当初の TOEIC スコアが 300 点ほどの大学生（仮に、A さん）であっても、目標意識をもって然るべき学習を続ければ 1 年以内に同スコアを 500 点以上に上げることは十分可能であると述べた。A さんは大学に入る以前に TOEIC を受験したことがなく、問題形式にも慣れていない状態で受験したとしよう。一般的に、事前にテスト形式に慣れていない状態で TOEIC を受験すると、実際の実力よりスコアが低くなることが知られている（Robb & Ercanbrack 1999）。また、その傾向が初級レベルの学習者に特に顕著に表れることは、土肥（2006）が「初回得点が低いほど上昇量が大きい傾向が見られる」と示唆していることと一致する。A さんのスコアが 300 点の場合、前述の標準偏差を考慮すると、そのスコア範囲は 265 - 335 である。しかし、初回受験であったため、テストの解答方法に慣れていないという要因で実力がスコアに適正に反映されていない可能性を踏まえると、実際のスコア範囲は 265 - 335 より高いところにあるかもしれない。

先述の X 大学 Y 学部の事例（グラフ 3・4 参照）によれば、年度初に取得した TOEIC スコアの平均を、年度末までに取得したベストスコアの平均と比較した場合、1 年次では平均して 153 点、2 年次では平均して 64 点上がっている。Y 学部では、TOEIC で 500 点以上のスコアを取得することが 1 年次から 2 年次への進級要件であり、600 点以上のスコアを取得することが 2 年次から 3 年次への進級要件である。つまり、1 年生と 2 年生の学習へのモチベーションは変わらないはずである。にもかかわらず、2 年次での伸びが、1 年次での伸びの半分にも満たないのはなぜか。Y 学部の 1 年生が年度初に取得する個々の TOEIC スコアは、おそらく多くの場合が初回受験であるため、実力より低いスコアになっている可能性がある。したがって、1 年次での平均 153 点という伸びは、実質的に下方修正される。一方、2 年次での平均 64 点という伸びは、テスト形式に十分慣れた上での結果であるため、実質的なスコア増であると考えられる。

しかしながら、その 2 年次での平均 64 点という伸びについても、それを個人に置き換えて考えると、次のように分析できる。TOEIC スコアは 5 点刻みなもので、65 点で考える。仮に B さんという 2 年生の学生のスコアが、1 年間で 570 点から 635 点に上がったとしよう。570 点のスコア範囲は、535-605 である。また、635 点のスコア範囲は、600-670 である。つまり、570

点と 635 点という 2 つのスコアは、測定誤差が加味されたスコア範囲で見ると、600 点で重なっている。これは、2 つのスコア数値の間に 65 点という差異があっても、それが実力の伸びを表しているとは限らないことを示している。まして、その 65 点が 1 年間に数回から十数回も受験した結果とあらば、明確な実力の伸びであると個人ベースでは断言しがたい。

以上、大学英語教育の目標が数値化されることの問題点を見てきた。その上で、(3) に挙げる 3 点を強調したい。

- (3) a. TOEIC などの英語の資格試験のための指導や対策が、大学英語教育そのものになってはいけない。
- b. いかなる英語の資格試験であっても、学習者の英語運用能力を完全に正確に計測できるものではない。たとえ社会で広く認識され、活用されている資格であっても、それぞれ異なる目盛をもったスケールに過ぎない。
- c. 特定のスケールによる計測数値を上昇させることと、学習者の英語運用能力を実質的に向上させることは、異なる次元の問題である。

結論として、大学英語教育が目指すべきところは、学生が将来さまざまな形で英語を使用する場合に、その「土台」となり得る要素を習得させることである、と主張する。次節では、その土台づくりへのアプローチとして、大学生（であっても初級英語学習者）に対する英語教育のなかに、言語研究のいくつかの異なるレベル（名詞句、文、形式、意味、解釈など）に関連させて導入し得る要素を、具体例として提示する。

5. 言語研究の要素をいかに導入するか

本節では、具体的に、言語研究のどのような要素が大学英語教育のなかに取り入れられると筆者が考えているかを述べる。但し、どのような科目のなかで、具体的にどのような方法で当該要素を織り交ぜていくかは、個々の教員の創意工夫に負うものである。本節では紙面の関係上、ほんの断片しか紹介できないが、「ウナギ文」「名詞句の形式特性」「コピュラ文」という 3 つの互いに関連した要素を取り上げる。これらの要素は、名詞句、文、形式、意味、解釈などの異なるレベルに関わる要素でもある。

(4) Are you chicken?

(4)には、「おまえ、おじけづいたのか」と相手を揶揄または侮辱するような発話としての解釈が可能であろう。しかし、(4)は、国際線のフライトで日本人の客室乗務員が英語で接客する折についで使ってしまう誤用フレーズでもあるそうだ(安藤・篠原 2013)。乗客に機内食のサービスを提供する際に、ビーフとチキンのどちらの食事を希望するかを聞いたあとに、ある外国人客の希望がどちらであったかわからなくなり、つい(4)を用いて確認してしまうことがまれにあるという。また、日本人客のなかにも、英語を話す乗務員に *What would you like to drink, sir?* などと聞かれて、とっさに *I'm orange juice.* などと答えてしまう向きもいるらしい。日本語話者が英語の [A is B] を用いるときに、どうしてこのような誤用が起きるのだろうか。そのような間違いをしないような土台づくりへのアプローチとして、「ウナギ文」の研究要素を取り入れることができる。

たとえば、飲食店に二人以上で入り、注文するものを決めるとき、店員からの「何になさいますか」という質問や、同伴者からの「君は何にする?」という質問に対して、「ぼくはウナギにする」と答える代わりに、「ぼくはウナギだ」という言うことがある。このような場合の「AはBだ」がウナギ文である(金田一 1955; 奥津 1978)。その意味構造を《ぼくは、[φはウナギだ]》と仮定すると、《ぼくは、[注文料理はウナギだ]》と解釈される(西山 2002, 2003; 今井・西山 2012)。「ぼくは学生だ」であれば、英語で *I'm a student.* といえる。しかし、鰻丼を注文するときの「ぼくはウナギだ」は、英語で *I'll have an eel bowl.* とは言えても、*I am an eel.* や *I'm an eel bowl.* とは言えない。日本語の [AはBだ] でできることが、英語の [A is B] ではできない場合があることは、「ウナギ文」という言語研究の要素を通じて認識することが可能だ。そうすれば、日本語の「お客様はチキンですか」の意味構造が《お客様は、[ご希望の機内食はチキンです]か》であると了解でき、(4)を誤って用いることもなくなると考えられる。

ウナギ文の意味構造が《ぼくは、[φはウナギだ]》であると仮定されると、φの値はコンテキストによってさまざまなもので埋められる。たとえば、「君の嫌いな食べ物は何?」「君は何の鰻を握っているの?」「君は何を捌いているんだい?」「君は何を捕まえようとしているんだい?」などの質問に対する答えとしても、「ぼくはウナギだ」は使用可能である。そこに含まれる「ウ

ナギ」という名詞句は、日本語では、①食材としての串や切り身になったウナギ、②捌く前のウナギ、③生きているウナギのいずれにも用いられる。しかし、英語で考えた場合は、①の場合は eel であり、②③の場合は an eel または eels である。日本語の「ウナギ」のような、普通名詞それ自体から成る名詞句は「素」の特性を有し、英語名詞句の[定][不定]の両方を一部ずつ包含する形式として捉えられる（中井 2013）。日本語と英語における名詞句の違いを明確に認識できるような土台づくりへのアプローチとして、「名詞句の形式特性」の研究要素を、意味・解釈のレベルと関連づけながら導入することが効果的だと考える。

最後に、「コピュラ文」を取り上げる。[A is B] と [A は B だ] における A と B はイコール関係で結ばれているわけではない（西山 2012, 2003）。(5) に示したように、[A は B だ] [A is B] の指定文としての意味は、A と B の位置を入れ替えて [B は A だ] [B が A だ] [B is A] にすると保持されなくなる。一方、(6) に示したように、[A が B だ] [A is B] という指定文の意味は、A と B の位置を入れ替えて [B は A だ] [B is A] という倒置指定文にしても保持される。

- (5) a. ジョンは学生だ。 × [学生はジョンだ。] × [学生がジョンだ。]
 b. John is a student. × [*A student is John.]
- (6) a. ジョンが優勝者だ。○ [優勝者はジョンだ。]
 b. John is the winner. ○ [The winner is John.]

日本語と英語のコピュラ文の違いを適切に理解できるような土台づくりへのアプローチとして、日本語の「は」「が」の区別、前掲の日英名詞句の形式特性、さらにはウナギ文の研究要素とも関連づけながら、大学英語教育だからこそ、有機的な構造としてのコピュラ文の理解が可能になるであろう。

6. おわりに

資格取得に特化された技能学習とは別次元の問題として、大学英語教育には、学習者の意識を、より広い視野で英語を学ぶことへ誘導する役割がある。今の大学英語教育に求められるものは、学生が将来さまざま形で英語を使用する場合に、その「土台」となり得る要素を習得させることである。その

ような「土台づくり」には、さまざまな形で言語研究の要素を導入することが可能である。英語の仕組みと働き、母語である日本語との比較、ことばと文化の関わりなど、大学英語教育にはさまざまな分野からのエッセンスを取り入れることができよう。

※本稿は、2013年9月28日に武蔵大学で開催された日本英語文化学会第16回全国大会シンポジウム《今の大学英語教育に求められるもの》において、提案者として口頭発表した「言語研究の要素を導入した大学英語教育」の原稿に加筆・修正を施したものである。本稿で用いたアンケート調査の実施に際し、野上文子氏にご協力いただいたことに感謝申し上げる。

註

¹ 国際ビジネスコミュニケーション協会が、全国の大学・短期大学・高等専門学校を対象に、電話による聞き取り調査を行ったのち、入学試験や単位認定で TOEIC テストの活用があると回答した学校宛てに用紙を送付し、返信してもらう（但し、2012年 はインターネットで回答してもらう）という調査を行ったものである。

² TOEIC の受験制度には、定期的に全国の会場で実施される公開テスト（SP: Secure Program）と学校・企業等の団体内で任意に決定した日時で実施される団体特別受験（IP: Institutional Program）がある。

³ アンケート実施時点で、すでに 600 点以上のスコアを取得している被験者も一部含まれている。

引証資料

- 安藤節子・篠原千夕起(2013)元国際線客室乗務員による情報提供(2013年9月,口述).
土肥 充(2006)「TOEIC IP による千葉大生の英語力の現状分析」『人文と教育』第2号,
pp. 15-29.
- 今井邦彦・西山佑司(2012)『ことばの意味とはなんだろう — 意味論と語用論の役割』
東京:岩波書店.
- 金田一春彦(1955)「日本語」『世界言語概説下』研究社.
- 国際ビジネスコミュニケーション協会(2013)「入学試験・単位認定における活用状況」
TOEIC テスト公式データ・資料, <http://www.toeic.or.jp/toeic/about/data/search.html>.
- 文部科学省(2013)「平成25年度大学入学者選抜実施要項」(平成24年5月31日付
文部科学副大臣通知)『大学入学志願者の多様な能力・適性等の評価について』.
- 中井延美(2013)「日本語と英語における定表現・不定表現の具現形式について」『英語
文化研究』日本英語文化学会創立40周年記念論文集, 東京:成美堂 pp. 274-284.

- 西山佑司 (2001) 「ウナギ文と措定文」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 33 号, pp. 109-146.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論 — 指示的名詞句と非指示的名詞句』東京: ひつじ書房.
- 西山佑司 (2012) 「テレビ『基礎英語』教材にもの申す」(未出版原稿).
- 奥津敬一郎 (1978) 『「ボクハ ウナギダ」の文法』くろしお出版.
- 大津由紀雄 (2009) 「「戦略構想」、「小学校英語」、「TOEIC」——あるいは、ここが正念場の英語教育」『危機に立つ英語教育』大津由紀雄編著、慶應義塾大学出版会 pp. 14-61.
- 大津由紀雄・江利川春雄・斎藤兆史・鳥飼玖美子 (2013) 『英語教育、迫り来る破綻』東京: ひつじ書房.
- Robb, Thomas N. & Jay Ercanbrack (1999) “A Study of the Effect of Direct Test Preparation on the TOEIC Scores of Japanese University Students,” *TESL-EJ (Teaching English as a Second or Foreign Language)* Vol. 3, No. 4, A-2, January.
- 安井稔 (2012) 「TOEIC の賢い利用法」『Web 英語青年』4 月号 (特別記事) pp. 20-35.

Synopsis

English language education in university introducing elements of linguistic studies

NAKAI Nobumi

Currently many universities tend to use English qualifying tests, such as TOEIC, as part of their entrance examination evaluation systems and credit certifications. Students are thus becoming enthusiastic in taking tests to obtain results, while examining their future employment prospects. In fact, some students are highly motivated to study English specifically to obtain a target score or grade in the test concerned. This could be viewed as “an approach to learning,” and the students could be making “moderate progress” with their English as well, but those would often be myopic and less substantial. In addition, some of the students are only interested in the limited elements of English language, which are oriented towards the test concerned, but not in the broader sense of language learning. This paper asserts that it is essential for university students to acquire a “foundation,” on which they could build, utilize, and expand their English proficiency after graduation, in whatever way would be required. The paper also suggests that such a foundation can be developed through their learning linguistic elements in various levels, including noun phrases, sentences, forms, meanings, and interpretation.

The Machiavellian Hero Henry V

亦部 美希

1 序論

歴史上のヘンリー五世は、1413年、即位するや積極的な大陸経営を目指し、翌1414年、フランス国内のブルゴーニュ派とアルマニャック派の内紛に乗じて休戦中であった百年戦争を再開し、1415年、アジャンクールの戦いで大勝し、フランス軍主力を壊滅させた英国の英雄である。シェイクスピア（William Shakespeare）の史劇第二・四部作の一つ『ヘンリー五世』（*King Henry V*, 1599）¹は、プランタジネット朝（1154-1485）の薔薇戦争（1455-85）を題材にした歴史劇であり、Lancaster家（赤薔薇）のヘンリー・ボリンブルック（後のヘンリー四世）の息子、ヘンリー五世の華々しい活躍を描いている。また、シェイクスピアの劇中人物ヘンリー五世は『ヘンリー四世第一部』（*The First Part of King Henry IV*, 1596-97）と『ヘンリー四世第二部』（*The Second Part of King Henry IV*, 1598）の両劇中に登場し、ハルとも呼ばれている。さて、劇中のヘンリー五世は、ニコロ・マキアヴェリ（Niccolò Machiavelli）の『君主論』（*Il Principe*, 1532）の、理想の君主が守るべき金言を実行している。たしかに、百年戦争を勝利に導いた、歴史上のヘンリー五世は、エリザベス一世と並び称される君主と言えよう。

マキアヴェリと言えば、我々はリチャード三世を想起せざるを得ない。なぜならば、リチャード三世は『ヘンリー六世第三部』（*The Third Part of King Henry VI*, 1590）3幕2場193行で “[I can] set the murderous Machiavel to school.” と独白して、人を裏切る残忍さと狡猾な罠で次々と政敵を倒すからである。しかし、リチャードは、マクベス同様、国を頽廃させた悪党として描かれている。リチャードは、真にマキアヴェリを教えることができる、真のマキアヴェリアンのヒーローとして、劇中で描かれているのだろうか。

『君主論』は近代政治学の基礎を築いた政治思想書である。マキアヴェリがロレンツォ・デ・メーディチに捧げた書で、全26章からなる。25章には君主の繁栄の鍵は「時代と状況がその統治を良とする」（186）こととある。この時、君主の責務はより多くの人々の心情を理解することであると言える。君主は、刻々と変わる社会情勢を的確に判断し、『君主論』献辞にあるように、

臣下の実態と君主のあるべき姿を見極めなければならない(10)。また、25章にあるように、君主は時に、持ち前の「性質が赴かせたところからおのれの身を引き離すこと」(186)を理想とする。なぜならば、場合によっては自分の性格上、資質上、不可能と思われる役目をこなす事態に陥るからである。本稿は、このような『君主論』が理想とする人物を、マキアヴェリアンのヒーロー(the Machiavellian Hero)と呼ぶことにする。OEDはMachiavellianを“A follower of Machiavelli; one who adopts Machiavelli’s principles in statecraft or in general conduct”と定義している(OED. “Machiavellian”)。

多くの批評家が、シェイクスピアとマキアヴェリ思想、ヘンリー五世とマキアヴェリの君主について、論述してきた。*The Cambridge History of English Literature and American Literature*は“*No work had a profounder influence upon the thought and policy of Tudor England than Machiavelli’s Prince*”と述べている(Vol.4, Ch.1, 4, 1)。ラーブ(Felix Raab)は、エリザベス朝の人々がイタリア語でマキアヴェリの著書を読んでいたことを、マキアヴェリの作品の需要、つまり、当時の、彼の作品の出版等を確認することで、明示している(『ディスコルシ』(*I Discorsi*, 1584), 『君主論』(*Il Principe*, 1584), 『戦術論』(*Arte della Guerra*, no date), 『フィレンツェ史』(*Istorie Fiorentine*, 1587), *The Golden Ass* (*L’asino d’oro*, 1588)) (52)。²さらに、ラーブは1553年、ハミルトン伯爵(James Hamilton, 2nd Earl of Arran)に、『君主論』のフランス語訳が献呈されたこと、海外で、イギリス人旅行者が、イタリア語、またはラテン語訳のマキアヴェリの著書を購入できたことを示している(53)。また、フランク・カーモードは、シェイクスピアがイタリア語を読めたことを次のように示している。シェイクスピア作『オセロ』(*Othello*, 1604)の種本、1565年出版されたジラルディ・チンツィオ(Giraldi Cinthio)の『百物語』(*Hecatommithi*)の第3篇7話は、当時英語訳がなく、シェイクスピアがフランス語訳(Gabriel Chappuys 訳、1584)を読んだと考える説、イタリア語の原文を読めたとの説があり、カーモードは、『オセロ』のキャショーの傷の説明の箇所など、シェイクスピアの表現がイタリア語の原文に影響を受けていると考えられることを指摘している(1198)。加えて、クレイグ(Hardin Craig)は、16世紀末にはいくつか存在していた『君主論』の英語の“manuscripts”をシェイクスピア時代の人々が読むことができた可能性を示している(xix-xxx)。さらに、バウカット(N. W. Bawcutt)は、英国民が、マキアヴェリの思想に対して、時にマキアヴェリの作品に関する純粋な知

識、または他者の引用などを通じて得た、歪められた知識を元に、³さまざまな反応を示し、その一致点を探るのは困難であると述べている (11)。例えば同時代の書、作者不詳の *Treatise of Treasons against Queen Elizabeth and the Crown of England* (1572) は、国を守るための『君主論』18章「時に応じて信義……に背いて行動することが必要である」との金言を挙げて、これを守れば裏切り、殺戮等災いが生じるとし、マキアヴェリを非難している (sig. ev. a5-a5^v)。他方、マキアヴェリに関する純粋な知識に基づく反応については、同時代人出版者のウルフ (John Wolfe)、ベーコン (Francis Bacon) が『君主論』の思想に賛同した記述が残されている (Wolfe *2^r, Bacon Bk.7, 17)。

批評家のクレッグ (Susan Clegg) が指摘する通り、後にヘンリー五世に対する反逆罪で処刑されるケンブリッジの洞察によれば、彼、ヘンリーは “Never was monarch better fear’d and lov’d / Than is your majesty” であり (H5, 2.2.25-26)、『君主論』17章の「愛され、かつ、恐れられることが望ましい」(59)⁴ という金言通りであり、状況に適合するよう、善良さと有用さの両方を使い分けている (187)。ヘンリーはフランスの町ハーフラーを占拠する際、おどろおどろしい暴力的な言葉と軍事力による威嚇でフランス市民に恐れられ町を手中に収めた。ハーフラーを占拠した後は、町で悪事を働いた自軍の旧友を処刑し秩序を守り (H5,3.6.102-118)、領土の支配をゆるぎないものとしている (H5,3.5.27-31)。これは『君主論』8章「ある政体を奪い取るにあたって、これを占拠する者は、なすべき必要な攻撃のすべてを……一挙に実行に移して、その後は繰り返さないことによって人びとを安心させ[る]」(71) との金言と共通している。批評家のマレット (Philip Mallet) は、ヘンリーが状況に適合するよう、役者のように他人になりすます点で、マキアヴェリアンであるとしている (77-80)。批評家のサリバン (Vickie Sullivan) は、ヘンリーがマキアヴェリアンであり、人々を国益になるように誘導する役者であると指摘している (131)。例えば、フランスとの戦い前夜、敗色が濃くなった状況下で、王や戦い、司令官たちへの兵の本音を聞きだすためには、聞き手が王本人であると知られないことが得策である。この時、ヘンリーは役者のように兵士になりすまし、国の命運を握る自軍の兵たちを訪れる。腹を割って話し合い、士気を高める。

以上をふまえて、本稿はヘンリー五世とリチャード三世に焦点をあて、シェイクスピアがいかにかマキアヴェリの『君主論』と共通する要素を取り入れ、国民的英雄としてのヘンリー五世を描いているかを究明する。

2 『君主論』の理想の君主と、シェイクスピアの劇中人物ヘンリー五世、リチャード三世との比較考察

第一に、行動様式を状況に適合させることが前述の二つの要素、持ち前の「性質が赴かせたところから、おのれの身を引き離すこと」と、君主がさまざまな場所に視点を置き、臣下の実態と君主のあるべき姿を見極めることを意味しているかを検討する。第二に、ヘンリーは、この二つの要素を理想としているかを検討する。第三に、ヘンリーが二つの要素を会得することで、成功しているのかを究明する。究明の方法は、マキアヴェリアン・ヒーロー、ヘンリー五世と、対照的なシェイクスピアのリチャード三世を比較することにある。ヘンリーが『君主論』の二つの要素を用いて『君主論』の金言を守り、リチャードが同一箇所の金言を守れないという点に、ヘンリーが二つの要素を会得した成果が現れるからである。

第一に、行動様式を状況に適合させることは前述の二つの要素を、意味しているのだろうか。マキアヴェリは、25章で以下のように述べている。

もしも時代と状況が変われば、[君主]のほうが行動様式を変えないかぎり、滅びてしまう。この点に適合できるほど、思慮深い人間は見出せない。なぜならば、[持ち前]の性質が赴かせたところから、おのれの身を引き離すことなど、人間にはできないから。……だが、もしも時代と状況に合わせて自分の性質が変わっていれば、自分の運命は変わらないであろうに。(186-87)

従って、君主が行動様式を状況に適合させることは時に、持ち前の「性質が赴かせたところから、おのれの身を引き離すこと」を意味する。

また、以下『君主論』献辞は、状況への適合は、君主がさまざまな場所に視点を置き、臣下の実態と君主のあるべき姿を見極めることだということを意味している。

風景を描こうとする者たちは低い平野に身を置いて……高地の特性を見極め、低地のそれを見極めるためには山々の上の高みに身を置きますが、まさにこれと同じように、人民の本性をよく知るには、君主であることが必要であり、また、君主たちのそれをよく知るには、人民である

ことが必要なのです。(10)

以上の引用は、『君主論』が、優れた君主が、多くの他者を理解しなければならないことを示していると言える。『尺には尺を』(*Measure for Measure*, 1604)において、ヴィエナ公爵のヴィンセンシオは修道士に変装して、公爵代理のアンジェロの様子を探る。権力が人をどのように変えるのか見てみようというものだが、『君主論』献辞に相通じるものがある。

第二に、ヘンリーは、この二つの要素を理想としているのであろうか。ヘンリーは次のように、生涯、生来与えられた自分の役回りをこなすだけの人々を、批判し、より多くの役を演じるという理想を抱いている点から、持ち前の性質が赴かせたところから、おのれの身を引き離すこと、さまざまな場所に視点を置き、臣下の実態と君主のあるべき姿を見極めることを理想としていると言える。

まず、ハル、王になる以前のヘンリーは、“all humours that have showed themselves humours since the old days of goodman Adam to the pupil age of this present twelve o’clock at midnight.” (*IH4*, 2.4.90-93) を味わおうとし、他の役を演じることに意欲的である。これまで演じた役は、盗賊をこらしめるごろつき (2.2.)、フォルスタッフ (2.4.)、ヘンリー四世 (2.4.)、給仕人 (2*H4*, 2.4.)、下士官オー・ヘンリー (*H5*, 4.1.)、サー・トマス・アーピンガムの隊の兵士 (4.1.) が挙げられる。

また、ハルは給仕フランシスが劇中で“plays the coward” (*IH4*, 2.4.47) だと述べ、その一役に始終するフランシスを批判している。

PRINCE. That ever this Fellow should have fewer words than a parrot, and yet the son of a woman! His industry is upstairs and downstairs, his eloquence the parcel of a reckoning. I am not yet of Percy’s mind, the Hotspur of the north, . . .
 . . . I’ll play Percy, and [Falstaff] shall play Dame Mortimer his wife.
 (*IH4*, 96-100, 107-8)

ハルは、フランシスはオウムより言葉を知らず、しゃべることといえば勘定書きを読み上げるだけだと批判し、次に、好敵手パーシーの役に挑戦しようと、視野を広げようとしている。そして、ハルがパーシーの気分まで味わえ

ないにせよ、フランシスより多くの気分を得ようと努力している点で、優越感を感じていることが窺える。

さらに、ハルは、前述のように、『ヘンリー四世第二部』で、給士の役を演じるのだが、ハルは、フランシスの役を学んだことから、自分の役柄しか演じない、自分の役の心情や考えしか分からないというフランシスの役の特徴を知り得たと言える。

そして、フォルスタッフが“that reverend vice”の役⁵ (1H4, 2.4.477)、“that grey iniquity”の役⁶ (478)、すなわち“a jester” (2H4, 5.5.48) をしているとされ、ハルは、フォルスタッフがあらゆることを、自分の徹する一役“a jester”に都合よく解釈することを指摘し、⁷ 批判している。『ヘンリー四世第二部』の最後の幕場で、ハルはフォルスタッフに“*How ill white hairs becomes a fool and a jester! / I have long dreamt of such a kind of man*” (2H4, 5.5.48-49) “*But being awak'd I do despise my dream.*” (2H4, 51) と述べている。フォルスタッフが自身の道化のような役柄にとって、都合のよい解釈しかしないのであれば、ばかばかしい冗談のような夢以外何も残らないのだとして、これに生涯を費やす彼を批判しているのである。なぜならば、以下のように、上の“dream”は、事実ではないもの、つまり、フォルスタッフの都合のよい解釈を意味し、その真実性のなさを端的に示す表現だからである。

まず、フォルスタッフの都合のよい解釈について、批評家のローは、フォルスタッフは物事の重要性を、それが知覚される観点を変えることで軽減していると述べている (68)。たしかに、ローが述べるように、フォルスタッフはクィックリーに “[Hal] ought [Falstaff] a thousand pound” (3.3.133) などと嘘を吹聴する。ハルが問い詰めるとフォルスタッフは “*A thousand pound, Hal? A million, thy love is worth a million, thou owest me thy love.*” (3.3.135) と取って返す。

次に、上の“dream”は、フォルスタッフの都合のよい解釈を意味し、その真実性のなさを端的に示す表現である。シェイクスピアはフォルスタッフの性質を、以下のように端的に表現している。

PRINCE. [Falstaff is] that trunk of humours, that bolting-hutch of beastliness, that swollen parcel of dropsies, that huge bombard of sack, that stuffed cloak-bag of guts, that roasted Manningtree ox with the pudding in his belly, that reverend vice, (1H4, 2.4.443-447)

But, sirrah, there's no room for faith, truth, nor honesty in this bosom of thine; it is all filled up with guts and midriff. . . . (IHA, 3.3. 152-54)

たしかに、ハルはフォルスタッフが楽しいこと、淫乱多情、食への興味の他には何もない男だと言い、真実ではない“dream”の中のように、フォルスタッフの中では、真実が全て退けられている様を解説しているからである。

さらに、ハルは前述のように、フォルスタッフの役を演じるのであるが、フォルスタッフの役を学ぶことで、真実を自分の都合のよいように自由に歪曲することができる、フォルスタッフの役の特徴を知り得たと言える。

以上の点から、シェイクスピアは、ヘンリーが多くの役を演じることに意欲を示し、生涯一役を演じるフランシスとフォルスタッフを批判していく中で、ヘンリーが『君主論』の二つの要素、持ち前の「性質が赴かせたところから、おのれの身を引き離すこと」と、君主がさまざまな場所に視点を置き、臣下の実態と人間の、君主のあるべき姿を見極めることを、ヘンリーが理想としていることを表現していると言える。

第三に、この二つの要素がヘンリー五世の成功を可能にしていることを究明する。ヘンリー五世の政治力を測るために、シェイクスピア史劇第一・四部作に登場するリチャード三世と比較考察することにする。

ヘンリーは「愛され、かつ、恐れられる」君主マキアヴェリアン・ヒーローであり、リチャードは残忍で恐れられるだけの君主でしかない。たしかに、後述のように、シェイクスピアの劇中では、リチャードは『君主論』の金言を守れず、この書の予告通り失敗している（亦部美希『リチャード三世』に見るマキアヴェリズム』（『異文化の諸相』第27号））。ヘンリーは奇しくも全く同じ箇所でも金言を守り、予告通り成功しているのである。

歴史上のヘンリー五世がリチャード三世より早い年代の人物であるのに、『ヘンリー五世』の劇が後年に書かれているという事実、二人が実に対照的に表現されていることから、この対照性の中にシェイクスピアの意図を探究する。

ヘンリーは王位篡奪者の息子であり、リチャードは王位篡奪者であり、政治的には篡奪者として似通った立場である。

リチャードはヘンリーの『君主論』の二つの心得とは、全く正反対の態度を取る。シェイクスピアはこれについて、ヘンリーと対照的な表現をしている。リチャードの良心の千の舌は皆リチャードの偽証歴を語り、リチャード

は自分自身から逃げたくて馬を探すが見つからない(R3, 5.3.178-196)。まず、良心に千の舌がある理由は、リチャードが口先と表情だけの役者として描かれ、二枚舌ならぬ千の舌を持つという表現だと考えられる。リチャードは “[I can] frame my face to all occasions” (3H6, 3.2.185) と豪語し、実際、嘘ばかりつくからである。次に、馬が見つからないのは、リチャードは顔つきだけ変えても、結局は自分以外の人物を演じられず、リチャード自身の限られた狭い役割から逃げ出したいという表現だと考えられる。たしかに、リチャードは “I and I” (R3, 5. 3. 184) ([Q 1; [I] am [I] Q 2-6, F. 189. I myself] Q1-5, F; my selfe Q6.) (R3, pp. 318) と述べ、自分が一役しか演じられていないことを語る。リチャードは持ち前の「性質が赴かせたところから、おのれの身を引き離」せない。そして、リチャードは一人ぼっちを貫く決心をし、他者の心情を知ろうとせず、役作りを放棄していると言える。実際、リチャードは “And this word ‘love,’ which greybeards call divine, / Be resident in men like one another, / And not in me: I am myself alone.” (3H6, 5. 6. 81-83) と語っているからである。リチャードはリッチモンドとの大戦前夜、王位を篡奪するために手にかけて人々の亡霊の夢を見て、ヘンリーと違い、“O coward conscience, how dost thou afflict me !” (R3, 5. 3. 180) と述べて、亡霊に怯えている。

反対に、ヘンリーはこの点について、以下の「悪しき隣人」、フランス軍との勝ち目のない決戦に際して、“[Our bad neighbors] are our outward consciences, / . . . ; admonishing / That we should dress us fairly for our end.” (H5, 4.1.8-10) と語る。リチャードと違い、ヘンリーは兵士になりすました折、兵たちに “By my troth, I will speak my conscience of the king: I think he would not wish himself any where but where he is.” (119-121) と述べる。これは、良心は外から引出せるのでどこかに逃げる必要がないという表現ではないだろうか。なぜならば、ヘンリーは外の良心について、戦いの前、次のように言っているからである。

... God Almighty !

There is some soul of goodness in things evil,

Would men observingly distill it out ;

For our bad neighbor makes us early stirrers,

Which is both healthful and good husbandry :

Besides, they are outward consciences,

And when the mind is quicken'd, out of doubt,
 The organs though defunct and dead before,
 Break up their drowsy grave, and newly move
 With casted slough and fresh legerity.

(H5 . 4.1.3-8, 20-23)

ヘンリーは、殺しにやってくるフランス兵のお蔭で早起きして時間を有効に使えることに感謝し、「彼らは心の外にある良心である」と語っている。これは、ヘンリーの良心が、彼自身の心の中にあるのではなく、上記引用文にある「全能の神」が創造した外界に置いていること、その「外の良心」から人は自由に感情を作り出すことができることを意味していると言える。なぜならば、ヘンリーは新しい感情を外界から得ることができる。心をこめる役者ヘンリーは、外界から新しい感情を得ることができる。ヘンリーは王の役目に応じて感情を入れ替えることを理想とするからである。ヘンリーは “We are no tyrant, but a Christian king ; Unto whose grace our passion is as subject / As is our wretches fetter'd in our prisons” (H5, 1.2-241-43)、と述べ、さらに、フルーエンスが “I need not to be ashamed of your majesty, praised be God, so long as your majesty is an honest man (4. 7. 117-19)” と言った際は、“God keep me so !” (120) と述べて、神が創造した状況次第で、いつでも悪人になる用意がある。批評家のローはヘンリーが従兄弟ヨークの死をなげき涙を流していたのに、敵が追撃したとたんすぐに捕虜の処刑を命じている様子を観察し、ヘンリーはいつでも環境の変化への準備が整っている、『君主論』の理想の君主であるとしている (63-64)。さらに、同開戦で将兵たちが恐怖のために “So many horrid ghosts” (H5, 4. Chorus 28) のように見えても、ヘンリーは環境に適応して不安を微塵も見せず、「幽霊たち」を励ましている (H5, 4. Chorus 25-45)。さらに、戦い前夜、ヘンリーが兵士になりすまして兵士たちの様子を窺った際、ヘンリーは二人の兵士に “By my troth, I will speak my conscience of the king: I think he would not wish himself any where but where he is.” (4.1.119-121) と述べている。これは、良心は外から引出せるのでどこかに逃げる必要がないという表現であると考えられる。たしかに、ヘンリーは新しい感情を外界から得ることができる。従って、ヘンリーは「外に良心

がある」ため、状況が必要とする資質を持つ役柄に次々と生まれ変わって、脱皮ならぬ変身を遂げることができると言える。

ヘンリーは以上二つの要素を發揮し、『君主論』8章、17章、20章の金言を守る。リチャードはヘンリーとは演技のレベルが違い、このことが二人の命運を分けることになる。

リチャードは常に悪党を演じ、前述のようにヘンリーが守った8章金言と、以下引用に示される「逆の考え」をもち破滅する。

[君主が政権を奪い取る場合、殺戮を一挙に成し繰り返さず、人々を安心させ、恩恵を与えて手なずけるという考え] とは逆の考えを取る者は、いつでも剣を握ってなくてはならない。また……臣民の上に安心して立っていることができない。(マキアヴェリ 71、72)

たしかに、リチャードは“*Our strong arms be our conscience, swords our law.*” (R3, 5. 3. 312) と述べ、いつでも剣を握っている。使者は、続々と反乱軍が増大していくことを告げ (4. 4. 498-519)、リチャードは臣民の上に安心して立ってられない。リチャードは17章金言をこなせない。

信じることや行動においては慎重であり、かつ、おのれの影に怯えてはならない。そして熟慮と人間味で抑制しつつ、……過度の不信によって耐え難いものにならないように行動すべきである。(マキアヴェリ 126)

まず、リチャードの従者が、リチャードが殺害した人々の悪夢を見た後、“*Nay, good my lord, be not afraid of shadows.*” (R3, 5.3.216) と言い、リチャードは“*... shadows tonight / Have struck more terror to the soul of Richard . . .*” (R3, 5.3. 217-8) と答え、自分が影に怯えていることを告白するのである。良心に照らし出された影に怯えて、“*Conscience is but a word that cowards use*” (R3, 5.3. 310) “*March on, join bravely, let us to it pell-mell— / If not to Heaven, then hand in hand to hell!*” (5.3. 313-14) と、開戦のスピーチで自軍に言ってしまう。敵のブランドが“*He hath no friends but what are friends for fear, / Which in his dearest need will fly from him.*” (5.2.20-21) と言い、「耐え難い」リチャードからの逃亡兵の存在に言及している。

他方、前述のように良心が外にあるヘンリーは、おのれの影に怯えず、

幽霊を元気付ける。まず、説明役は、戦い前夜、怯えるイギリス兵たちは一人一人が“*So many horrid ghosts*” (H5, 4. Chorus 28) のように見えていても、Chorus はヘンリーについて、“*Upon his royal face, there is no note / How dread an army hath enrouned him ;*” (H5,4. Chorus 35-36)、“*That every wretched, pining and pale before, / Beholding him, plucks comfort from his looks.*” (4.Chorus 41-42) と語っているからである。次に、ヘンリーは前述のように、兵士の役を演じることで慎重に本音を聞きだす。兵ベイツが、“*. . . I would he were here alone ;*” (4.1.122) と述べると、ヘンリーは“*I dare say you love [Henry] not so ill to wish him here alone, . . .*” (5.3.125-26) と述べ、17章の金言通り、人間味を発揮し、士気が高まるよう説得を続けている。

第二に、ヘンリーはリチャードより多くの人々に共感することで20章の金言を守るが、リチャードはそれを守れず、側近バッキンガムに裏切られている。

[あなたのことよりも自分のことのほうを考えている]輩は忠実な側近になるはずがなく、断じてあなたは信頼してはならない。……他方において、君主も……側近のことを思いやり、その名誉を称え、彼を富ませることによって……多大な名誉がそれ以上の名誉を望むことがないように、多大の富がそれ以上の富を望むことがないように、また多大な任務が政変の生ずることを彼に恐れさせるように、配慮しなければならない。(172-73)

リチャードは金言に反し、バッキンガムに約束のヘリフォードの伯爵領を与えない(4. 3. 118)。リチャードは、前述のように愛を分かち合う似たもの同士たちとは断絶しているので、軍事予算となりうる多大な財産を、よく分らない、信頼関係を持たない人に任せられないのであろう。

他方、ヘンリーは金言通り行動し、スクループ、ケンブリッジら側近に裏切られるが、最後には、裏切った側近は3人とも忠実になっている。しかし、側近の裏切りの要因は『ヘンリー六世 第一部』(*The First Part of King Henry VI*, 1589-90, 2.5.53-92) で説明されるように、ヘンリー五世の父四世の、リチャード二世からの王位篡奪であり、君主ヘンリーの落ち度ではない。まず、ヘンリーはケンブリッジについて“*My Lord of Cambridge here, / You know how apt our love was to accord / To furnish him with all appertinents*

/ Belonging to his honour” (2. 2. 85-88) と述べ、ケンブリッジに上の金言通り、彼を思いやり、多大の富と名誉がそれ以上の富と名誉を望むことがないように待遇している。また、裏切ったケンブリッジを、ヘンリーは “And this man / Hath, for a few crowns, lightly conspired, . . .” (88-89) と非難するも、ケンブリッジは金貨のための謀反ではないと言い (155)、『君主論』の金言の通り、ヘンリーは多大の富がそれ以上の富を望むことのないようにしている。また、側近グレーについて、ヘンリーは “. . . to [the practices of France] / This knight, no less for bounty bound to us / Than Cambridge is, hath likewise sworn” (91-93) と述べて、その待遇はケンブリッジと同様である。さらに、ヘンリーは上の金言通り、スクループに多大な富がそれ以上の富を望むことのないように、多大な任務が政変の生ずることを恐れさせるようにしている。なぜならば、ヘンリーはスクループに “Thou that didst bear the key of all my counsels, . . . , / That almost might’st have coin’d me into gold, / Would’st thou have practis’d on me for thy use, . . .” (96-99) と述べているからである。加えて、その裏切りの奇怪さについて、May it be possible that foreign hire / Could out of thee extract one spark of evil / That might annoy my finger?” (100-2)、 “[T]is so strange / That, though the truth of it stands off as gross / As black and white, my eye will scarcely see it” (102-4)、 “gainst all proportion” (109) “The fiend that wrought upon Scroop preposterously] Gave thee no instance why thou should’st do treason / Unless to dub [Scroop] with the name of traitor” (119-20) と述べ、奇怪さの表現はこれらを合わせて、100行から127行の27行にわたっている。ヘンリーはスクループが至上の忠臣であったことについて、127行から137行、10行にわたって述べ、さらに、 “[T]hy fall hath left a kind of blot / To make the full-fraught man and best indued / With some suspicion.” (H5, 2.2. 138-140) と述べている。この執拗で過剰な表現は、シェイクスピアが、『君主論』の金言を守って、ヘンリーが忠臣を見極めて側近にしていること、側近に裏切る理由を与えていないことを表現していると考えられる。

結果として、側近3人もが次のように自分より君主のことを考えて、『君主論』の忠臣と同様に描かれている。ケンブリッジは計画が阻止されたことを “. . . God be thanked for prevention; / Which I in sufferance heartily will rejoice” (158-59) と言い、側近グレーは “Never did faithful subject more rejoice / At the discovery of most dangerous treason / Than I do at this hour joy o’er myself” (161-63)、 “My fault, but not my body, pardon, sovereign” (165)

と言うからである。金言通り、ヘンリーは、忠実な臣下を持ったと言える。

ヘンリーはリチャードと全く異なり、『君主論』の金言通り成功したマキアヴェリアン・ヒーローである。リチャードは二枚舌、残忍さなどマキアヴェリへのエリザベス朝時代の通俗的なイメージと重なる君主であるが、劇中では、『君主論』の金言を何一つ十分に守れず、破滅したと言える。ヘンリーの、リチャードとの違いは、言葉などうわべだけを状況に合わせて変えるのではなく、国家を守るという変わらない理想を持ち続け、そのためにおのれの「性質」を変えることにあったのである。ここから、前述のハル、つまり、ヘンリーの二つの要素の会得が、ヘンリー五世のマキアヴェリアン・ヒーローとしての活躍に寄与していたことが分かる。第一に、ヘンリーはさまざまな場所に視点を置き、臣下の実態と君主のあるべき姿を見極めていた。人は自分の役柄しかこなさない、自分の心情や考えしか分からないことを知っているので、相手の身の丈にあった役柄を演じて、分かり合おうとした。第二に、ヘンリーはフォルスタッフがしたように、人は真実を自分の都合のよいように自由に歪曲することができるを知っている。従って、ヘンリーはたとえ敗色が濃くとも与えられた絶望という心の真実を安んじて受け容れなかった。何も無いところから、国家安寧に向かうための新しい心を作り出した。この時、ヘンリーは持ち前の「性質が赴かせたところから、おのれの身を引き離すこと」ができていた。シェイクスピアがこれを、ヘンリーの良心が外の良心だと表現しているように、ヘンリーは良心をおのれの身から引き離して、外におくことができているのである。『君主論』8章の金言を守った際は、ヘンリーは良心をおのれの身から引き離して、敵国の臣民の上に安心して立つために、臣民の所有物を盗んだ旧友バードルフを処刑することができた。敗戦色濃い時、17章の金言を守った際は、ヘンリーは自身があるべき王の姿を示すために、恐怖するべきでないから、恐怖していないだけで、人間であるから、必ずしも怖くないわけではないと告白している (H5, 4.1.100-113)。そして、リチャード三世が恐怖して耐えがたい者となって17章の金言を守れなかったことと反対に、17章の金言通り耐えがたい者とならなかったばかりか、恐怖する臣民を元気づけた。20章の金言を守った際は、ヘンリーが側近に裏切られた時の態度から、他者を心から愛し、信頼し、自分を滅ぼせるほどの名誉、富、役職を分け与えることを、国家のためにおのれの身を賭して行っていたことが伺える。なぜならば、前述のようにケンブリッジをヘンリーは心から愛していたのであり、グレーもケンブリッジと同

様に待遇したのであり、スクループに “[Thou] [t]hat knew’st the very bottom of my soul” と述べ (2.2.97) たのだから、ヘンリーが一個人としての当然の性質から、おのれの身を引き離さなければ、裏切りへの憎しみは言わずもがなである。しかし、ヘンリーは王のあるべき姿を示し、スクループに “I will weep for thee;” と述べ、彼を含めた三人の側近に “Touching our person seek we no revenge; / But we our kingdom’s safety must so tender” (174-75)、“Poor miserable wretches, / . . . God of his mercy give / You patience to endure,” (178-79) と述べるだけだからである。

3 結論

以上みてきたように、シェイクスピアがいかに『君主論』と共通する要素を取り入れて、『ヘンリー五世』と『リチャード三世』を作劇したかが分かる。

シェイクスピアは『ヘンリー五世』を、『君主論』25章の「行動様式を[状況]に適合させることができるほど、思慮深い人間は見出せない」という問題提起に、演劇の観点から解決策を提示するかのように作劇している。

まず、シェイクスピアは、『君主論』8章、17章、20章と酷似した金言を実行する君主ヘンリーを成功させている。次に、その成功の秘訣は、多くの役を演じ多くの人に共感していく力、つまり、役者が与えられた真実を安んじて受け容れず、人の心を新たに創っていく能力、自身の心情からおのれの身を引き離すヘンリー五世の能力にあることが描かれているのである。

このように、『ヘンリー五世』と『リチャード三世』は、『君主論』に照らして比較・考察すると、みかけはいかにも類似しているが、リチャードとヘンリーは全く異なる君主だということが分かる。

役作りを拒否し、役の人間の心情を創造できないリチャードは、自分の中の恐怖から『君主論』8章、17章を守れず、人間を信頼できず20章が守れず、破滅する。役作りができるヘンリーは、自分の良心を外に置き、環境に応じて、王としておのれのあるべき姿を変えて、リチャードが守れなかった金言を守ることができた。旧友を処刑して8章の金言を守り、人間の自然な、死への恐怖を克服して17章を守り、金言20章を守ったのに側近に父四世の王位篡奪のため裏切られ、愛情と信頼を踏みにじられても、なお、王のあるべき姿を示し、側近に個人的な憎しみを見せることはなかった。

*本稿は平成22年度日本英語文化学会第13回全国大会(2010年9月4日、駒澤大学深沢キャンパス)における口頭発表の原稿「マキャヴェリアンヒーロー ヘンリー五世」に加筆・修正を施したものである。

註

¹以下作品の初演の年はThe Riverside Shakespeareの推定による。テキストはThe Arden Shakespeare版を使用した。

²16世紀、『君主論』はイングランドで禁書であったが、実際には、ウルフの出版によって、ロンドンの人々はこれを見ることができた(Raab 52)。

³歪められた知識のために、リチャード三世はマキアヴェリを誤解しているのかもしれない。

⁴拙論は原則として、引証資料は原文で引用したが、第一資料の一つである『君主論』の原文がイタリア語であるため、河島訳を引用した。但し、拙論において重要な意味を持つ「愛され、かつ、恐れられる」という表現に限り、和訳で用いられる表現は要旨の展開に不適切であるため、Machiavelli研究の権威であるQuentin Skinnerが編集した『君主論』の英訳*The Prince* (1988)を直訳し、引用した。

⁵*OED*によると、viceは“A character in a morality play representing one or other vice; hence, a stage jester or buffoon.”

⁶*OED*によると、iniquityは“The name of a comic character or buffoon in the old morality plays, also called the vice, representing some particular vice, or vice in general.”

⁷フォルスタッフは劇中でヘンリー四世とハルの役をやるが、台詞は全てフォルスタッフを称えるありえないものである。パーシーの妻の役をハルはやらせようとするが、彼が役作りができていないかどうかは、実際に妻の役を劇中でしていないので不明。

引証資料

- Bacon, Francis. “Of Goodness and Goodness of Nature.” *Francis Bacon The Major Works*. Ed. Brian Vickers. The Oxford World Classics. Oxford: Oxford University UP, 2002.
- Bawcutt, N.W. Introduction. *The Jew of Malta*. By Marlowe, Christopher. Ed. Bawcutt, N. W.. New York: Manchester UP, 1978. 1-15
- Clegg, Cyndia Susan. ‘Feared and Loved: Henry V and Machiavelli’s Use of History.’ *Ben Jonson Journal* 10 (2003): 179-207.
- Craig, Hardin. Machiavelli’s *The Prince*, An Elizabethan Translation. London: The University of North Carolina Press, 2011.
- “iniquity” “Machiavellian.” “vice” *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. CD-ROM. Oxford: Oxford UP, 2009.
- Kermode, Frank. Introduction. *Othello, the Moor of Venice, The Riverside Shakespeare*. Ed. Evans, G. Blakemore. Boston: HoughtonMifflin CO., 1793. 1198-1202

- Mallet, Phillip. 'Shakespeare's Trickster-Kings: Richard III and Henry V.' *The Fool and the trickster: studies in honour of Enid Welsford*. Ed. Williams, Paul V. A. Thetford, Norfolk: Lowe and Brydone Printers Ltd, 1979.
- Machiavelli, Niccolò. *The Prince*. Ed. Skinner, Quintin. and Trans. Russel Price. Cambridge: Cambridge UP, 1988.
- Raab, Felix. *The English Face of Machiavelli*. London: Routledge & Kegan Paul, 1964.
- Roe, John. *Shakespeare and Machiavelli*. Cambridge: D.S. Brewer, 2002.
- Shakespeare, William. *The First Part of King Henry IV*. Ed. A. R. Humphreys. The Arden Shakespeare. London : Methuen & Co. Ltd, 1914.
- . *The Second Part of King Henry IV*. Ed. A. R. Humphreys. The Arden Shakespeare. London : Methuen & Co. Ltd, 1981
- . *King Henry V*. Ed. J. H. Walter. The Arden Shakespeare. London: Methuen & Co. Ltd, 1960.
- . *The First Part of King Henry VI*. Ed. Andrew S. Cairncross. London: The Arden Shakespeare. Methuen & Co. Ltd, 1962.
- . *The Third Part of King Henry VI*. Ed. Andrew S. Cairncross. London: The Arden Shakespeare. Methuen & Co. Ltd, 1965.
- . *King Richard III*. Ed. Antony Hammond. The Arden Shakespeare. London: Methuen & Co. Ltd, 1981.
- Sullivan, Vickie. 'Princes to Act: Henry V as the Machiavellian Prince of Appearance.' *Shakespeare's Political Pageant*. Eds. Alulis. London: Rowman & Littlefield Publishers, 1996.
- Treatise of Treasons against Queen Elizabeth and the Crown of England*. 1572.1 (Anon)
- Whibley, Charles Harleys. "Translations" *The Cambridge History of English Literature*. Vol 4. Eds. A,W, Ward and A. R. Waller. Cambridge: Cambridge University Press, 1932
- マキアヴェリ・ニコロ、河島秀昭訳『君主論』東京：岩波文庫、1998年
- 亦部美希「『リチャード三世』に見るマキアヴェリズム」『異文化の諸相』第27号（東京：日本英語文化学会、2006年）33-48.

Synopsis

The Machiavellian Hero Henry V

MATABE Miki

The purpose of this paper is to offer a critical comparison, on the one hand, between both King Richard III in the first tetralogy of Shakespeare's history plays and King Henry V in the second tetralogy, and, on the other, the Machiavellian

concepts of Chapter 8, 17, 20, and 25 of *The Prince*.

The Prince argues that interest precedes virtue and justice, and princely pretense is a strong weapon in politics, so the princes should utilize it especially in Chapter 18 of *The Prince*. In addition, when we define a Machiavellian, I would like to refer to Machiavelli's model of ideal princes, expressed in Chapter 25 of *The Prince*. His ideal princes devote their all to their own nations and people. They should never aim at their own interests as they please. The maxims of Chapter 8, 17, and 20 support those in Chapter 25 of *The Prince*.

My essay argues that the maxims of *The Prince* function as the structural devices which show how all the world's a stage, and all the men and women merely players.

Paradise Lost と Space Trilogy

——*Out of the Silent Planet* における「沈黙」の考察¹——

伊藤 佐智子

はじめに

1667年に出版された『樂園の喪失』(*Paradise Lost*)は、17世紀英国の叙事詩人ジョン・ミルトン(John Milton, 1608-74)が旧約聖書の「創世記」を題材に描いた長編叙事詩である。19世紀英国の作家C. S. ルイス(C. S. Lewis, 1898-1963)は、『ナルニア国年代記』(*The Chronicles of Narnia*, 1950-56)の作家として知られているが、1942年に『「失樂園」序説』(*A Preface to Paradise Lost*)を出版したミルトンの研究者でもある。『沈黙の惑星を離れて』(*Out of the Silent Planet*, 1938)、『ペレランドラ』(*Perelandra*, 1943)、『かの忌まわしき砦』(*That Hideous Strength*, 1945)の3作品は主人公ランサム(Ransom)の名をとってRansom Trilogy、あるいはCosmic / Space Trilogyと呼ばれるSF三部作で『ナルニア国年代記』以前に描かれた作群である。

この三部作の第1巻の題名に使われている“Silent Planet”という語は地球を指している。この第1巻において、主人公ランサムは、他の惑星で地球が「沈黙の惑星」(Silent Planet)と呼ばれている事実を知る。各惑星にはオヤルサ(Oyarsa)と呼ばれる統治者がそれぞれ存在し、相互に交流がある中、地球のオヤルサだけが「曲がったもの」(bent one)となってしまう、他の惑星間との交流が阻まれた状態であり、火星のオヤルサはランサムに“Thulcandra [the Earth] is the world we do not know. It alone is outside the heaven, and no message comes from it.”(*Out of the Silent Planet* 153)と説明する。

何の発信も交流もない状態の地球を「沈黙の惑星」と呼ぶことに違和感はない。しかし、現代の地球を表現するにあたって、ルイスが多くの言葉の中から“silent”という語を選択したことに注目したい。なぜなら作中、“silent”及び“silence”という語句が非常に多く用いられており、ルイスが「沈黙」という言葉をキーワードとして用いた可能性を十分感じ取ることができるからである。それでは、ルイスはこの「沈黙」という語にどのような意味を持

たせようとしたのだろうか。ルイスのSF三部作にはシリーズを通して、『楽園の喪失』という作品名や本文の引用、類似した場面が複数認められ²、『ナルニア国年代記』にミルトンの主題が認められると野呂の指摘もあるように³、ルイスがミルトンを意識して物語を創作していたことは明らかである。そこで、今回の「沈黙」を考察するにあたり、『楽園の喪失』において、ミルトンが用いた“silent”や“silence”について検討し、『沈黙の惑星を離れて』における「沈黙」を考察する手掛りとする⁴。

1. 『楽園の喪失』と「沈黙」

沈黙や静寂を表す語として、“still”、“stillness”、“quiet”、“mute”なども挙げられるが、“Silent Planet”の由来を考察するため、本稿では“silent”、“silence”、“silently”に焦点を当てる。

“silent”の状態は、穏やかな静けさを表現することもあれば、不気味な静寂を表現することも、ただ音のない静かな状態を表すこともある。そのため、本稿では「沈黙」を以下の3つに分類したい。

1. 平和や穏やかさなどポジティブな要素を持つ“silent”
2. 不安や恐怖などネガティブな要素を持つ“silent”
3. 自然描写など純粋に静かな状態を表現する“silent”

“silent”がポジティブな要素を表現するものであるか、ネガティブな要素を表現するものであるかに分け、どちらの要素も含まれない“silent”をそれ以外とする。たとえば、『楽園の喪失』第3巻「御子の柔和なみ顔は黙してなお語り」(his meek aspect / Silent yet spake, III 268)の“silent”は、平和と和解を説く御子の穏やかな表情を表すものであり、ポジティブな意味として分類する。また、第1巻「恐ろしい静寂」(the horrid silence, I 83)は、“horrid”に形容されていることから明らかなように、セイタン(Satan)のいる地獄に広がる不気味な静けさを指すため、ネガティブな“silent”に分類する。第2巻「音もなき緩流」(a slow and silent stream, II 582)や、第4巻「静かな夜」(silent night, IV 647)は、自然描写以上の意味を持たないため、分類3に分けられる。

さて、“silent”がネガティブな状態に限定されないことは既に述べたが、

まず、『樂園の喪失』において、天界における沈黙の状態がほとんど描写されていないことを指摘したい。

2. 天界における音楽と「沈黙」

『樂園の喪失』において、天使が歌を歌ったり楽器を演奏したりして、美しい調べを奏でる場面は印象的である。第3巻では、天使たちは豎琴 (golden harps) や賛美歌 (hymn) で父なる神や御子を讃え (365-71)、第6巻では凱歌にて御子を言祝ぎ、御子の天への帰還を迎えるために賛歌を歌っており (885-8)、第7巻では天と地の誕生に歓喜の歌を調べ (254-9)、天地創造のみ業を讃える場面が描かれている (595-9)。つまり、天界は、天使の合唱隊 (the celestial choirs) による演奏や賛歌によって、常に美しい音楽や歌声で満ちている。

and the work ordained,
Author and End of all things; and, from work
Now resting, blessed and hallowed the seventh day,
As resting on that day from all his work,
But not in silence holy kept: the harp
Had work and rested not; the solemn pipe,
And dulcimer, all organs of sweet stop,
All sounds on fret by string or golden wire,
Tempered soft tunings, intermixed with voice
Choral or unison: (PL VII 591-9 下線部は論者による。以下同様)

引用下線部のとおり、神が天地創造を終え、迎えた第7日目、すなわち安息日でさえ、天界は楽器の音色や歌声で満たされている。つまり、聖日であっても神は決して沈黙した状態 (in silence) で過ごすことがなく、天において静寂や無音、沈黙は無用のものであることが分かる。つまり、ミルトンの描く天界は音楽や歌と強く結びつき、静寂および沈黙の状態とは遠く離れた場所であると言える。

しかしながら、そのような天界を沈黙が支配する場面がある。それは天界において、神が人間の過ちを贖う者を募る場面においてである。“He [God]

asked, but all the heavenly choir stood mute, / And silence was in heaven” (PL III 217-8) 神の問いかけに対し、天使一同は口を閉ざし、天界は物音ひとつしない (mute)。これに類似した光景は、新井と平井が指摘しているように以下のように地獄でも見られている。

This said, he [Satan] sat; and expectation held
His look suspense, awaiting who appeared
To second, or oppose, or undertake
The perilous attempt: but all sat mute,
Pondering the danger with deep thoughts (PL II 417-21)

この場面では、神の問いかけに対し、人類の罪を贖う者として自ら志願することができない天使たちの消極的な様子が、美しい音楽や歌声で満たされることの多い天界におとずれた「沈黙」によって浮き彫りにされている。さらに言えば、天界の天使たちでありながら、セイタン率いる墮天使たちに共通するネガティブな要素を持つ「沈黙」に支配されるという点から、より消極的な要素が強調される。

また、天界だけでなく、アダムとイヴの間においてもネガティブな要素を持つ沈黙が認められる。以下に引用するのは『楽園の喪失』第9巻において、禁忌を犯し墮落してしまったイヴに出会ったアダムの描写である。

On the other side Adam, soon as he heard
The fatal trespass done by Eve, amazed,
Astonied stood and blank, while horror chill
Ran through his veins, and all his joints relaxed;
From his slack hand the garland wreathed for Eve
Down dropt, and all the faded roses shed:
Speechless he stood and pale, till thus at length
First to himself he inward silence broke. (PL IX 888-95)

対話中の沈黙は、相手と意思疎通の図れない状態を意味する。第8巻において、アダムは自分に相応しい人間の相方を求めて神と対話をする。第5巻から8巻に続く大天使ラファエル (Raphael) とアダムの対話では、ラファ

エルは樂園を脅かす危険を警告すると同時に、アダムの要望に応え天界での大戦を語る。また、アダムとイヴにおいても、第5巻で悪い夢を見たイヴをアダムが励ます場面 (V 92-131) や、第9巻で分業について話し合うやり取り (IX 204-377) など、身分や階級の隔てなく、対話を通してお互いの意思疎通を深めるやりとりが描かれ、『樂園の喪失』においてミルトンが対話・会話に重きを置いていることが読み取れる。しかし、上記引用下線部において、アダムとイヴの会話のさなかには「沈黙」が訪れている。この“inward silence”は壊されているが (broke)、アダムはそれまでは黙ったまま (speechless)、つまり「沈黙」した状態である。彼の内 (inward) に訪れた「沈黙」はアダムの思考の停止を表すものと考えられ、イヴの墮落を目の当たりにしたアダムの衝撃の大きさを示すものである。また、それと同時に、アダムとイヴの夫婦の会話に沈黙が訪れることは、2人の信頼関係の崩壊を象徴するものであり、天界同様、アダムとイヴにおいても、会話を重んじる夫婦の間におとずれる「沈黙」からはネガティブな要素を読み取ることが可能である。

3. 『沈黙の惑星を離れて』、『ペレランドラ』における沈黙

次にルイスのSF三部作における沈黙を考察していく。第1巻・2巻における物語の簡単な概要は以下のとおりである。第1巻で、言語学者ランサム (Ransom) は、予備学校時代の同級生ディヴァイン (Devine) と物理学者ウェストン (Weston) によって火星マラカンドラへと連れ去られ、そこで理性を持つ生き物たちと出会う。火星では種族の異なる3種の生物が篤い信仰心を持って共生しており、その平和な生活には悪の概念さえ存在せず、諍いや戦争もない。そのような別世界の生き物との触れ合いを通して、ランサムは地球に生息する人間がいかに「曲がった」(bent) 生き物であるかを実感する。地球に帰還したランサムは、第2巻で、エルディル (Eldil: 天使) からの使命を感じ取って金星ペレランドラへと赴く。墮落前のエデンの園に値する金星には、アダムとイヴに相当する王 (the King) とグリーン・レイディ (the Green Lady) がおり、人類の始祖同様、神に禁じられた掟を守って生活しているところに、悪に支配され非人間 (Un-man) となったウェストンが現れ、彼らを墮落させるためにグリーン・レイディを誘惑する。ランサムは、金星の始祖の墮落を防ぐという使命を全うし、最終的に誘惑者を退ける。そして、

墮落を免れた金星の始祖は王と女王として金星を授かり、ランサムは地球に帰還する。

第1巻、2巻ともに主人公ランサムは、他の惑星の生物の生き方、考え方に接することで、地球の人間の在り方や己の価値観を再構築していく。一切の欲や悪の概念を持たず、マレルディル (Maleldil: 創造主) を篤く信仰しながら種族の異なる生き物が共存する火星及び金星の在り方は、人間の到達し得ない理想 (unattained ideals) のようだとランサムは述べている (*Silent Planet* 91)。

『沈黙の惑星を離れて』の火星マラカンドラには、フロス (hross)、ソーン (sorn)、プフィルトリッジ (pffltriggi) の三種類の生物が生息している。見た目はそれぞれ大きなアシカ、背の高い宇宙人、巨大な虫のようであり、まったく異なる種族である。その中でフロスは、文学的活動に優れ、歌や詩を好む生き物として描かれており、『楽園の喪失』の天使たちのように、狩猟や儀式において日常的に歌に親しむ習慣がある。“They [hrossa⁵] go down, singing, to the edge of the lake. The music fills the wood with its vibration, though it is so soft that I can hardly hear it: it is like dim organ music.”(*Silent Planet* 204) また、マラカンドラの生き物たちはそれぞれ種族ごとに言語を持っているが、共通語を用いて交流・共存しており、火星ではコミュニケーションの不成立による沈黙もない。そのため、『沈黙の惑星を離れて』において多用されている「沈黙」の表現は、火星の生物より、人間であるランサム、ディヴァイン、ウェストンに多く、特に対話の不成立を示す「沈黙」が多いことが指摘できる。火星へと向かう宇宙船の中で、連れ去られる形で同乗するランサムは、状況を把握するためにウェストンとディヴァインに質問を投げかけるが、大抵のことには適当な返事が返ってくる一方、都合の悪いことに対しては、寡黙なウェストンのみならず、多弁なディヴァインも「沈黙」し、その度に会話が終了してしまう (*Silent Planet* 33)。さらに地球へ帰還する宇宙船の中においても、3人は酸素を無駄にしないためにと最低限の会話しか交わさず、宇宙船内は「沈黙」が支配する (*Silent Planet* 187)。このような描写において、ルイスは、人間である彼らを「沈黙の惑星」の住人として強調していると言える。

また、他の生物によって、人間たちが「沈黙」を命じられる場面も見られる。以下の引用は、火星マラカンドラ侵略を計画する人間ウェストンとディヴァインが、火星の生物をむやみに殺したことによりその仲間たちに捕えら

れ、火星のオヤルサと対峙する場面である。ここで火星のオヤルサは、その生き物を殺した理由について2人に尋ねるが、嘘をつこうとするディヴァインと、偏った持論を展開しようとするウェストンは、両者とも質問に対して求められた返答をしない。そのため、引用下線部にあるように、オヤルサによって2人はそれぞれ沈黙を命じられてしまう。

‘Steady, Weston. These devils can split the atom or something pretty like it. Be careful what you say to them and don’t let’s have any of your bloody nonsense.’

‘Huh!’ said Weston. ‘So you’ve gone native too?’

‘Be silent,’ said the voice of Oyarsa. ‘You, thick one, have told me nothing of yourself, so I will tell it to you...’ (*Silent Planet* 171)

‘No, no, Oyarsa,’ he [Devine] shouted. ‘You no listen him [Weston]. He very foolish man, he have dreams. We little people, only want pretty sun-bloods. You give us plenty sun-bloods, we go back into sky, you never see us no more. All done, see?’

‘Silence,’ said Oyarsa. (*Silent Planet* 172)

相手から一方的に命じられる「沈黙」は、対話が成立していないという相手からの宣言にほかならない。さらに、こうした対話の不成立により、話し合いによる相互理解や価値観の見直しの可能性は否定され、他の惑星と人間及び地球との通信復旧の可能性は、この時点において明確に否定されていると捉えることができる。

また、第2巻『ペレランドラ』においては、会話の不成立のみならず、自問自答する中で答えを見出せない主人公ランサムに「沈黙」が認められる。

The terrible silence went on. It became more and more like a face, a face not without sadness, that looks upon you while you are telling lies, and never interrupts, but gradually you know that it knows, and falter, and contradict yourself, and lapse into silence. The voluble self petered out in the end. Almost the Darkness said to Ransom, ‘You know you are only wasting time.’ (*Perelandra* 178)

自問自答を繰り返しながらも、己の問いかけに対し、答えを見つけることができないランサムに訪れるのは“terrible silence”である。この場面においてランサムは、「非人間」(Un-man)となり不眠不休で活動できるウェストンとの長期的な戦いに疲労困憊し、自分が何をしたらよいかを見失っている。彼は、エデンの園のイヴと金星のグリーン・レイディを比較しながら、試金石としての掟の在り方や、従順に掟を遵守することに疑問を感じ始める。その結果、心の中で問いかける自分・答える自分、そのどちらもが「沈黙」し、神に対する信仰心に揺らぎが生じたまま、答えが出ずに苦しむ。

4. セイタンと「沈黙」

さらにこの場面では、「沈黙」と「暗闇」(darkness)が共起していることも指摘できる。

The answer which came back to him, quick as a fencer's or a tennis player's riposte, out of the silence and the darkness, almost took his breath away. It seemed blasphemous. . . .He was horrified when the darkness simply flung back this argument in his face, almost impatiently. (*Perelandra* 173)

『樂園の喪失』において“dark”や“night”は“silent / silence”と共起し、セイタンと「沈黙」を結び付ける性質を持っている。天界を追放されたセイタンは、天界や樂園を大っぴらに動き回ることが許されない存在であるため、闇や夜の暗さにまぎれ、相手に悟られぬよう音を立てずに行動しなければならず、こそこそとするセイタンには“dark”、“night”、“silent”とその類語が自然と付きまとう。

Deep malice thence conceiving and disdain,
Soon as midnight brought on the dusky hour
Friendliest to sleep and silence, he resolved
With all his legions to dislodge, and leave (*PL* V 666-9)

So all ere day-spring, under conscious night,

Secret they finished, and in order set,
With silent circumspection, unespied. (PL VI 521-3)

また、引用において、墮落を防ぐことの意味を見失ってしまったランサムに訪れる沈黙の形容詞に“terrible”が用いられているが、『楽園の喪失』第1巻の地獄の描写において、“And thence in Heaven called Satan, with bold words / Breaking the horrid silence, thus began” (PL I 83) とあるように類似した表現を挙げることができる。今まで述べてきたことから、「沈黙の惑星」の住人である人間には、『楽園の喪失』のセイタンと同じように、ネガティブな意味合いを持つ「沈黙」が多く見られることが指摘できる。

さらに、セイタンと「沈黙」を結びつける描写として以下の表現に注目したい。

O Progeny of Heaven! Empyreal Thrones!
With reason hath deep silence and demur
Seized us, though undismayed. Long is the way
And hard, that out of Hell leads up to light.
Our prison strong, this huge convex of fire,
Outrageous to devour, immures us round
Ninefold; and gates of burning adamant,
Barred over us, prohibit all egress.
These passed, if any pass, the void profound
Of unessential Night receives him next,
Wide-gaping, and with utter loss of being
Threatens him, plunged in that abortive gulf. (PL II 430-41)

地獄を支配するのは「恐ろしい沈黙」であり、セイタンたちは引用下線部にあるように「深い沈黙と躊躇い」に捕らえられている。さらに、セイタンと沈黙を結びつける決定的な描写がある。

For strength from truth divided, and from just,
Illaudable, nought merits but dispraise
And ignominy; yet to glory aspires

Vain-glorious, and through infamy seeks fame:
Therefore eternal silence be their doom. (PL VI 381-5)

引用は天使軍と叛乱軍による戦の場面である。ここで、語り手となっているのは、作者ミルトンであるが、ミルトンは「永遠の沈黙」こそが、セイタンたち叛乱軍に与えられるべき運命であると述べている。叛乱軍においては、名誉を熱望してもその活躍は語る価値がない、というのがミルトンの主張である。ここでミルトンは、真理と正義から離脱した力を振りかざす行為が汚名と恥辱に値するものと述べ、それゆえ、「沈黙」が彼らへの罰であり運命にふさわしいとしている。ここで表現されている“eternal silence”とは、叛乱軍の名誉が以後語られることのない“doom”であるとともに、「沈黙」の支配する地獄への投獄という罰を示すものである⁶。

4. 『沈黙の惑星を離れて』における“silent”の原因

さて、セイタンと沈黙の関係を踏まえた上で“Silent Planet”についても少し考察していく必要がある。

C. S. ルイスは、『失楽園』序説』において、神が天使たちの頭として自分を差し置いて御子（キリスト）を挙げたことによって、セイタンが「自分の真価が損なわれたと感じた」(He thought himself impaired, PL V 665) ことにセイタンの叛乱の動機を言及している (A Preface 95-6)。つまり、セイタンは天界において実質的な被害を被っておらず、彼自身が自分の存在を蔑ろにされたように感じただけにすぎないのである。このような感情は、他者を見下す姿勢、自分こそが優れたものである、優遇されるにふさわしい、という驕った考えによるものであると言える。さらにルイスは、セイタンが戦う目的が自由 (liberty) ではなく、名誉 (Honor)、支配 (Dominion)、栄光 (glorie)、名声 (renoune) (PL VI 422) のためであることを指摘している (A Preface 99)。

『沈黙の惑星を離れて』の中で、地球で起こる争いや支配においてランサムが火星の生き物であるゾーンに意見を求めると、その中の1人オーグレー (Augray) は “It is because every one of them [people] wants to be a little Oyarsa himself, . . . There must be rule, yet how can creatures rule themselves?” (Silent Planet 129) と答える。この答えは、創造主に対する篤い信仰心を示

すと同時に、人間の愚かさを浮き彫りにするものである。オヤルサは惑星を統べる存在であり、惑星の支配者を指す。そのため、ここで示される「小さなオヤルサ」は「小さな支配者」であると理解できる。オーグレーの台詞の後半にもあるとおり、被造物が創造神を越えてその世界を支配することは不可能であり、「小さな支配者」になりたがる人間は、信仰心に欠けるとともに、被造物でありながら支配欲を抱く傲慢な生き物と言える。つまり、『沈黙の惑星を離れて』における地球の人間は、『楽園の喪失』において、傲慢にも自らを優れたものであると考え、名声や栄光を獲得するために叛乱を起こしたセイタンと同じ要素を備えていると言える。

第1巻『沈黙の惑星を離れて』の後半で、火星のオヤルサがウェストンとディヴァインとの会話から導き出したものは、「曲がったオヤルサ」(bent one) によって地球の人間たちも歪められてしまった、という結論である。「曲がったオヤルサ」の存在が、地球を「沈黙の惑星」としてしまった全ての元凶なのである。しかしながら、地球のオヤルサは最初から曲がっていたわけではないということが、火星のオヤルサによって以下のように語られる。

It was not always so. Once we knew the Oyarsa of your world—he was brighter and greater than I—and then we did not call it Thulcandra. It is the longest of all stories and the bitterest. He became bent. That was before any life came on your world. Those were the Bent Years of which we still speak in the heavens, when he was not yet bound to Thulcandra but free like us. It was in his mind to spoil other worlds besides his own. (*Silent Planet* 153)

地球のオヤルサは、その変貌の要因は述べられていないが、以前は惑星間を自由に行き来することができ、輝かしく偉大な存在であったとされる。ここで言われている“bent”は文字通り「曲がった」の意であるが、悪の概念が存在しない火星において、悪を表現するのに最も近い言葉として用いられている。つまり、以前は偉大な惑星の統治者であったのにもかかわらず、悪しき存在になってしまった、ということである。この要素は、かつては天界に住む輝かしい天使であったにもかかわらず地獄に堕ちた経緯を持つセイタンと共通するものである。さらに、大いなる戦いのすえに地球の大気の中に閉じ込められたという展開も、地獄に閉じ込められたセイタンと類似していることが指摘できる。

このように、ルイスが表現する「沈黙の惑星」における「曲がったオヤルサ」には、セイタンに類似した要素が多く認められる。そして、そのようなセイタンの要素を備える「曲がったオヤルサ」の支配下にある人間たちは、セイタンの要素を持つ曲がった生き物となってしまうことが示唆される。

5. 結論：“Silent Planet”とセイタンの運命“eternal silence”

『楽園の喪失』における天界は歌や音楽に満ち、「沈黙」とは無縁の世界として描かれることが多いため、神が贖いを集った際に天界を襲った「沈黙」は天使たちの消極性をより強調するものとして捉えられる。また、アダムとイヴの夫婦間に訪れる「沈黙」は2人の関係の崩壊を意味するものとして捉えることが可能である。さらに、闇夜とともに訪れる静寂は、敵に悟られぬようこそそと行動するセイタンと結びつくものである。そのうえ、天界から追放されたセイタンたちは地獄にて「沈黙」に捕らえられた状態である。

『沈黙の惑星を離れて』に描かれる火星マラカンドラにおいても、3種の生き物が争うことなく共存しており、コミュニケーションが成立しない状況はなく、また、日常的に歌を好む生き物も描かれる一方、作品内で「沈黙」と結びつくのは、「沈黙の惑星」（地球）の住人、人間である。それは、「曲がったオヤルサ」の支配下にあるために、人間もまた曲がった性質を持つからである。傲慢さや支配欲から、それぞれが「小さなオヤルサ」（a little Oyarsa）になりたがり、同じ種族同士で醜い争いを起こす人間は、セイタンに通ずる性質を備えているとすることができる。宇宙において、地球だけが他の惑星と切り離され「沈黙」の状態にあるのは、天界を追われ、「永遠の沈黙」に囚われたセイタンに重なる。

『沈黙の惑星を離れて』のランサムは、火星の生物たちの生き方を前に、地球に住む人間の生き方を深く恥じており、「沈黙の惑星」という表現が良い意味を示さないことは明白である。そして、『楽園の喪失』におけるネガティブな意味を持つ「沈黙」は、セイタンと深く結びつくものであった。以上の考察から、ルイスが“Silent Planet”と名づけた地球に、天界と交流が途絶えた不通の状態を意味するほか、『楽園の喪失』におけるセイタンの要素を重ねることは十分可能である。理性を持つ生き物として理想的な生き方を示す火星と金星の生物たちとは対照的に、人間は名誉、支配、栄光、名声を求めて愚かな争いをする。そのような人類に潜むセイタンの要素を、ルイスは語

るにふさわしくないものとして、セイタンの断罪である「永遠の沈黙」から「沈黙の惑星」と表現したのである。

註

¹ 本稿は、日本大学英文学会平成24年度1月例会（日本大学文理学部2012年1月26日）において口頭発表した「Paradise Lost から読む C. S. Lewis —— Space Trilogy における「沈黙」の考察——」を加筆・修正したものである。

² 『ペレランドラ』には“Paradise Lost”の作品名の引用がある(218)ほかに“even a sombre tragic Satan out of *Paradise Lost*, would have been a welcome release from the thing he was actually doomed to watch.”(157)が挙げられる。また、『沈黙の惑星』において、主人公ランサムと火星の生物との初対面の場面は“like the meeting of the first man and the first woman in the world”(66)とあり、“Come back”と叫んで未知なる生物を呼び止めるランサムの姿は、『楽園の喪失』において“Return fair Eve”(IV 481)と呼びかけイヴを追うアダムとの類似性が認められる。

³ 『ナルニア国物語』におけるミルトンの主題の考察については、野呂有子『『ナルニア国年代記』におけるミルトンの主題 - 『最後の戦い』を中心にして』（東京成徳短期大学紀要第29号、1995. 65-75.）が挙げられる。

⁴ ルイスのSF三部作のうち、第1巻、2巻は主人公ランサムによる地球から他の惑星への旅を描くものであるが、最終巻である第3巻は地球が舞台となり主人公も異なる。そのため、本稿では第2巻についても触れながら、第1巻を中心に考察を進め、第3巻には言及しない。

⁵ hross の複数形。

⁶ doom には「運命、宿命(fate)」の意味と「罪の判決」の意味がある。平井正穂訳は「定め」、新井明訳は「断罪」としている。The Oxford English Dictionary, doom, 5. The action or process of judging (as in a court of law) ; judgment, trial. arch. に第6巻817行の引用がある。Milton P. L. VI. 817 Therefore to mee thir doom he hath assign'd.

引証資料

Lewis, C. S. *A Preface to Paradise Lost*. London; Oxford UP, 1942.

— *Out of the Silent Planet*. London; HarperCollins Entertainment, 2005.

— *Perelandra*. London; HarperCollins Entertainment, 2005.

Milton, John. Edited by Alastair Fowler, *Paradise Lost*. London and New York: Longman, 1996.

— 新井明訳『楽園の喪失』、東京：大修館、[1978] 1983.

— 平井正穂訳『失楽園』、東京：岩波文庫、[1981] 2008.

The Oxford English Dictionary. 2nd ed. Oxford: OUP, 1989.

Synopsis

Paradise Lost and the Space Trilogy: A Study of "Silent" in *Out of the Silent Planet*

ITO Sachiko

The purpose of this article is to consider the reason why C. S. Lewis decided to use the word "silent" to express the modern earth in his Space Trilogy.

The Space Trilogy by C. S. Lewis consists of *Out of the Silent Planet* (1938), *Perelandra* (1943), *That Hideous Strength* (1945), and "the Silent Planet" of the title of the first book means the earth of today. The Earth is called "the Silent Planet" by rational living creatures on Mars in this series because an evil master of planet earth prevents the earth from associating with other planets in the universe. It is open to question why Lewis selected the word 'silent' among the many words he could use to express the earth in modern times. What does "silent" of "the Silent Planet" mean beyond its literal meaning?

C. S. Lewis is not only a writer but also an eminent Milton scholar who published *A Preface to Paradise Lost* in 1942, and he took elements of *Paradise Lost* in his works. Therefore, from *Paradise Lost*, it is possible to explore the sort of silence represented by Lewis. In *Paradise Lost*, silence deeply relates to Satan when it has a negative meaning, and in *Out of the Silent Planet*, silence usually has a negative meaning. Through a comparison of silence in *Paradise Lost* to in *Out of the Silent Planet*, it is clear that silence represented by Lewis contains the satanic overtones found in *Paradise Lost*.

幕が上がるまで

——イザベラにみる『幕間』という過渡期の女性像

西野方子

ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf; 1882-1941) の『幕間』 (*Between the Acts*, 1941) は、第二次世界大戦が開戦する直前の 1939 年 6 月、田舎にあるポインツ・ホールにおいてオリバー家主催のパジエントが開かれる一日の様子を描いた小説である。『幕間』はパジエントと、それを見る観客の様子をオリバー家を中心に描き出すフレームストーリーの、二つのテキストで構成されている。この二つの物語は分離しているものの、互いに影響を及ぼし合う。観客の反応はパジエントに干渉し、パジエントは観客の行動に影響を与える。

『幕間』におけるパジエントとそのフレームストーリーとの関係を考える上で、両者が結婚物語という共通のプロットを有していることは注目に値する。パジエントの中心を占める、エリザベス朝、王政復古時代、ヴィクトリア朝の三つの幕は、ジェームズ・ネアモア (James Naremore) やパトリシア・クラマー (Patricia Cramer) も指摘しているように、どれも結婚に関するエピソードを描いたものである。そして、オリバー家を描くフレームストーリーもまた、イーザとジャイルズの結婚生活を巡る物語をそこに書込んでいる。この共通点が指摘されることは少ないが、結婚はこの小説における重要なテーマなのである。

オリバー家を結婚や家庭という文脈から考えたとき、その大きな特徴は母という存在の希薄さである。ヘザー・イングマン (Heather Ingman) も論じたように、オリバー家には「母」は存在しない。肖像画に描かれた出自不明の “an ancestress of sorts” (7) としての女性、過去の “in a very different world” (8) で母であったバートとルーシーの母、一切語られないジャイルズの母、更には、主人公であるイーザ自身が二児の母でありながら家庭的であることや母性的であることを嫌い (she loathed the domestic, the possessive; the maternal) (14)、娘であり姪 (Sir Richard’s daughter; and niece of the two old ladies at Wimbledon) (12) であり続けている。ともに結婚物語を描いてきたパジエントとフレームストーリーが、イーザとジャイルズの向かい合う

最後の場面で接合することからも、夫婦生活におけるイーザの母そして妻としてのアイデンティティの危うさは考察すべき問題である。

母というテーマは、ウルフにとってだけではなく、同時代の女性作家やフェミニストたちにとっても重要なものであった。¹ ジェーン・ハリソン (Jane Harrison) はその一例として挙げられよう。彼女はウルフと同時代に活躍した、ギリシャ神話を研究し先史時代における母権制を論じた学者でありフェミニストである。ジュディ・リトル (Judy Little)、アイリーン・バレット (Eileen Barrett)、クレマーらは、『幕間』という作品にハリソンの影響を見出すが、母権社会を含めフェミニズムのコンテクストからこの作品が論じられる際、注目が集まるのはパジェントの作者であるラ・トロヴや、太古の歴史に思いを馳せるルーシー・スウィズィンである。それに対し (Barret を除き)、“Isa is included in this matriarchal group, but she is connected to the outsiders by parts of her identity at odds with the qualities that make her acceptable as mother and wife . . . Isa’s potential to live differently draws her toward Lucy and Dodge, but her domestic loyalties hold her back.” (Cramer, 173) という議論が現すように、イーザは最終的に家庭に回収され、家父長制のシステムの中でジャイルズの息子を再生産する者として論じられることが多い。“Isa is a prisoner in her father-in-law’s home [Pointz Hall]” (Marcus, 94) というジェーン・マーカス (Jane Marcus) の言葉が、彼女の評価を端的に物語っている。

母は、一方で賞賛され、もう一方で抑圧の対象として語られる両義性を持つ。当時の母をとりまく言説の一つであった家庭の母の道德性は、暴力に歯止めをかけ、国に平和をもたらす美德とされた。しかし同時に、家庭外の領域に出ることを禁じられた母は、平和のために戦う大英帝国の国民の再生産を義務とされ、帝国に潜む暴力性を助長させる。男性中心主義に抵抗しつつも、自らの理論に道德的母という帝国主義的イデオロギーを援用したのがハリソンの議論であった (Garrity, 67) と指摘するジェーン・ギャリティ (Jane Garrity) は、同様の試みと葛藤を戦間期の女性モダニスト作家たちに見出している。

Eschewing literal motherhood, they [Richardson, Warner, Butts, and Woolf] instead position themselves as daughters of the nation, suggesting that this filial relation is a necessary precondition of citizenship for women. Yet precisely because the ideology of motherhood was understood to

be a national imperative, British women modernists still had to negotiate this conceptual impasse in their attempts to situate themselves as national subjects. Although Richardson, Warner, Butts, and Woolf often balk at the supposition that the reproductive female body legitimizes women's participation in national life, each nevertheless taps in to the correlative presumption that women are morally superior beings by trading on the idea of women's national responsibility and simultaneously alluding to the fact that Britain is already expressly gendered as a 'feminine' national body. (2)

ウルフら女性モダニストたちは、「産む性」としての女性性には疑問を呈しつつも、女性の方がより「道徳的」とであるという定説を援用し、大英帝国からその暴力性を取り除き国家を道徳的に救出する者として、女性の主体回復と権利獲得を目指していたというのが、彼女の議論である。

この議論はイーザの「母」になることへの葛藤に新たな解釈をもたらす。彼女は、父権制における母となることを拒否すると同時に、平和をもたらす道徳的「娘」として、母とは異なる自己を模索しているのである。娘、すなわち道徳的女性としての在り方は、『幕間』と同時期に書かれたウルフのエッセイ「空襲下で平和に思いを寄せる」(Thoughts on Peace in an Air Raid, 1940)に見出すことができる。戦時下に女性がすべき平和のための戦いとは、“[men's] fighting instinct, their subconscious Hitlerism” (218) を生み出す伝統や教育などの制度から男性を救出するための戦いであり、女性が男性へもたらす新たな創造性こそが、軍事行為において功績をなすことを教育された青年たちを暴力から救済し人々を平和へと導いていくことが、そこで述べられている。

ウルフは多くのエッセイの中で、男女の調和、平和、創作を結びつけている。平等を前提とした男女の調和の状態は、平和においても創作においても欠かせないものである。『自分だけの部屋』(A Room of One's Own, 1929)で論じられたように、創作する上で作家が携えなければならないものは“two sexes in the mind” (88) すなわち “the androgynous mind” (89) であった。また、『三ギニー』(Three Guineas, 1938)では、ファシズムと大英帝国がともに保持する暴力を阻止し、平和をもたらすため、公的領域に属する男性と私的領域に属するアウトサイダーとしての女性の共同戦線が必要であること

が論じられている。男女が平等で調和のとれた状態は、創作においても平和においても、ともに重要なものなのであり、これらの三つの要素をひとつに結びつけ、男女の調和によってもたらされる創作が平和を生むと結論づけたのが、先に引用した「空襲下で平和に思いを寄せる」なのだ。

創作と平和の基礎をなす男女の調和は、『自分だけの部屋』において「結婚」(marriage) (94) という言葉によって表象されている。ウルフは、男女の平等を基にした新たな「結婚」が、傑作を生み平和な世界をもたらすと考えていた。「空襲下で平和に思いを寄せる」には、女性の母性本能と男性の戦闘本能が、子を産む女性の生産性と男性の攻撃性が、結婚によって平和をもたらす創造性へと書き代わる未来へのウルフの望みが反映されている。女性によってもたらされる創造は、大英帝国の母として国民を再生産し帝国主義とその暴力を永続させるためのものから、その暴力を断ち切り平和を生み出すためのものへと変化する。それを可能にするのは、帝国主義を支える家庭制度における男女の結びつきとは異なる、男性と女性が同等の価値を持ち調和するような、新たな結びつきなのである。

幕間は、母として、また詩人として「未成熟」(abortive) (12) であったイーザが言葉を獲得し、「豊穡」(fertile) (125) な土地の上でジャイルズとともに想像する者となるその過程を描いた物語として読むことが可能である。最後の場面において、葛藤の末に手に入れた言葉とともに、彼女はこの日初めて夫と二人きりで向かい合う。彼らはパジェントに続く物語の主人公であり、二人の戦いの後の抱擁が新たな生命の誕生をもたらすことが漠然と示唆されている。未来に対して開かれた結末ではあるものの、そこに男女の調和によってもたらされる創作が平和をもたらすかもしれない未来を読み込めることを、本稿で論じていく。

パジェントにおける結婚劇

先に述べたように、パジェントと、その幕間のオリバー家の様子を描いたフレームストーリーは、結婚という共通の主題を扱っている。“in the very heart of England” (13) でイギリスの文学史を描くパジェントは、大英帝国を支えてきた結婚と家庭の歴史を描き出す。それは島の誕生から始まり現在までの歴史を時系列的に描くのだが、現在を描く幕において、ラ・トロウヴは舞台の上の様々な鏡に観客を映し出すという演出を試みる。観客を舞台に

上げ、彼らが現在を体現する演者であることを示すのである。このような演出によって、パジェントの観客は自らに、私たち読者は観客の様子を描いたフレームストーリーに、つまりイーザとジャイルズの結婚生活に、現代の結婚物語を見出すよう促されるのだ。

ラ・トローヴのパジェントは、愛国心を煽り、大英帝国を称揚するようにつくられていた当時のパジェントとは大きく異なる。² その最大の特徴は、地方史を上演するのが通例であった中、題材として文学史を選択したことにある。『自分だけの部屋』において、歴史的事件においては不在である女性が、文学作品の中では重要人物であり続けてきたことを指摘したウルフが、パジェントの主題に文学史を選んだことには意味がある。パジェントは文学史を上演することで、家庭という舞台を背景にした女性の歴史を描くことを可能にするのである。

パジェントが示すのは、旧世代の価値観を裏切る新世代の結婚も、男性中心主義を維持するために変わらず機能してきたという事実である。親世代の当初の企みを覆すように捨てられた王子と結婚するエリザベス朝のヒロインであるカリンシア、おぼの計画から逃れ家を捨て恋愛結婚をする理性の時代のヒロインであるフラヴィンダ、安定を望む母に隠れ植民地へ異教徒を改宗すべく植民地での結婚生活を望むヴィクトリア朝のヒロインであるエレナー—エリザベス朝、王政復古時代、ヴィクトリア朝のそれぞれの三つの幕において、娘たちは親世代の思惑からは外れた結婚を繰り返す。それにも関わらず、帝国における家庭の在り方は変わらず存続し続けてきた。それぞれの時代を象徴する人物として登場するエリザベス女王、擬人化された理性、警察官は全員がみな、男は富を求め海の向こうで働き、女は子とともに彼の帰りを家で待つという、大航海時代以降領土を広げてきた大英帝国における典型的な結婚の在り方を時代を超えて語り続けている。

現在の幕に入るとその様相は様変わりする。それまでの時代とは異なり、結婚劇が演じられることもなく、わかりやすいプロットもない。先述したように、観客を自然に浸し、鏡によって舞台上げるラ・トローヴの実験的な演出によって、進行中の現在の物語は観客の中にこそ映し出されることが仄めかされるが、厳密に言えば、パジェントの幕間に書き込まれたイーザとジャイルズの結婚劇が始動するのは『幕間』の物語の最後においてである。“The future disturbing our present.” (51) と語り、現在の先に未来を見るイーザにとって、現在は未来への過渡期であり、この小説の焦点はパジェントと

その続きの物語をつなぐ「幕間」の時間を描くことに当てられていると考えられる。ラ・トロヴのパジェントは、エリザベス朝からヴィクトリア朝まで、一日の時間のながれを形成する。エリザベス朝は夜の時代である。老婆は子を“at a winter’s night, before dawn” (55) に捨て、その後のセレモニーは“ere the envying sun / Night’s curtain hath undone.” (57) に行われている。理性の時代は朝である。スパニエルはハーピーのもとを“so early” (77) に訪れ、フラヴィンダはヴァレンタインと“early morning.” (82) に密会する。ヴィクトリア朝は日中から夕暮れどきの物語であり、ピクニックの場面から始まって人々が家路に着く夕暮れに幕を閉じる。これらに続くイーザとジャイルズの物語の舞台は“midnight,” (126) に設定されていることから、それは新たな一日の始まりを告げるものとして想定されているのだ。

過去から未来へと橋渡しとして現在を考えたとき、性差別廃止法が制定された1919年に関する『三ギニー』の以下の引用は示唆的である。

That, Sir, was the right [to earn one’s living] that was conferred upon us less than twenty years ago, in the year 1919, by an Act which unbarred the professions. The door of the private house was thrown open. In every purse there was, or might be, one bright new sixpence in whose light every thought, every sight, every action looked different. Twenty years is not, as time goes, a long time; nor is a sixpenny bit a very important coin; nor can we yet draw upon biography to supply us with a picture of the lives and minds of the new-sixpenny owners. But in imagination perhaps we can see the educated man’s daughter, as she issues from the shadow of the private house, and stands on the bridge which lies between the old world and the new, and asks, as she twirls the sacred coin in her hand, ‘What shall I do with it? What do I see with it?’ (130-131)

“Marriage, the one great profession open to our class since the dawn of time until the year 1919” (*Three Guineas*, 121) であった時代は変わりつつある。夫婦関係が再出発する『幕間』の最後の場面に至るまでにイーザに起こった変化は、結婚という夫婦関係の在り方に変化を与える可能性を秘めている。続くセクションではフレームストーリーに目を向け、イーザの変化とそれがもたらす新たな男女のパートナーシップの在り方を探っていく。

イザの言葉：「現在、私たち」が生み出す新たな結婚劇

イザを軸に考えると、『幕間』のフレームストーリーは、言葉を獲得するイザの物語として読むことができる。母や妻として生きることに葛藤を抱いていたイザのアイデンティティの不確かさは、彼女を「未成熟」(Abortive)(12)にする。その未成熟さゆえに言葉を奪われ、恋心を抱くルパート・ヘインズへの思い、そして子どもたちへの思いに、表現を見つめることができないでいたイザは、物語の中で言葉を獲得していく。『幕間』の最後の場面がイザとジャイルズとの「会話」の直前に設定されていることから、彼女の言葉の獲得は物語の重要な要素である。ラ・トローズが目撃したように、その言葉は「豊穡な」(fertile)(125)大地から生まれたものであり、ここでイザが未成熟であることを克服したことが仄めかされている。

言葉の獲得は、プロットの拒否から始まる。エリザベス朝の幕で演じられる結婚物語のプロットは、“love and hate”(31)というジャイルズへの感情をイザに呼び起こさんとする。そこで彼女は、愛と憎しみというただ二つの感情だけを呼び起こす結婚物語のプロット(The plot was only there to beget emotion. There were only two emotions: love; and hate.) (56) から距離をとり、その代わりに老婆が繰り返す“*There is little blood in my arm*”(56)という言葉をも自分のものとして口に出す。文脈から切り離されたその台詞は、愛と憎しみ以外の3つめの感情である“*peace*”(57)と、つまり平和と死の平坦な状態と結びつき、愛と憎しみの結婚物語のプロットを宙吊りにし、そこに捕われていたイザに変化の糸口を与えた。このプロットの宙吊り状態はパジェントが終わるまで続くが、彼女が新たなプロットを必要とするまでの間に、彼女は言葉の所有者となり、口から溢れ出る言葉が彼女を満たしていく。

イザは溢れ出る言葉によって、ポインツ・ホールを變形する。テラスを進みながら、蓮池を願いを叶える泉に、温室を復讐の場に、家畜小屋を荒野に、言葉を紡ぐことでつくり変えていく。蓮池の女の幽霊の話、サンズ夫人の前任者がスプーンにヘアピンを落としたエピソード、喉が渇いているのにその欲求が他人への義務によって制限されてしまったことが、願いを叶える泉への入水物語へと組み込まれていったように、ポインツ・ホールという家庭の領域でのエピソードを再編成しながら、彼女は物語を生み出していく。アレックス・ツバードリング(Alex Zwerdling)はイザの言

葉を“The lines she writes are a kind of geriatric pastoral, full of echoes from an older poetic dispensation and quite incapable of conveying the reality of her own experience.” (230) と評したが、彼女の言葉は自らの現実世界を反映させたものであり、イーザの言葉は未来の散文への可能性を内包した、新たな時代の作品をつくり出す言葉なのである。エッセイ「詩、フィクション、そしてその未来」(Poetry, Fiction and the Future, 1927)において、散文が取り入れるべきものは現在では失われてしまった詩の要素であるとウルフは主張している。また、“How am I burdened with what they drew from the earth; memories; possessions. This is the burden that the past laid on me” (93) という言葉が示すイーザの背負う重みは、物語の作者が背負う重みである。作家の仕事とは、過去になされた言葉同士の無数の結びつきから生み出されてきた、意味や記憶と付き合いながらも、新たな意味を生み出すことであるという「クラフトマンシップ」(Craftsmanship, 1937)のウルフの議論は、イーザの背負うものを表現する言葉である。

このようなイーザの変化をもたらしたものは、パジェントだけではなく、ウィリアム・ドッジとの交流でもあった。パジェントの指揮者であるラ・トロヴと同様、ウィリアム・ドッジもまたアウトサイダーである。彼はマンレーサとともにポインツ・ホールにやってきた来客であるが、その登場シーンにおいて、彼らは一家の団らんを邪魔する“an obstacle” (25)として描写される。最後の場面に見られるポインツ・ホールの家としての機能の崩壊は、彼ら二人の登場が予兆していた。ドッジとマンレーサには、パジェントの幕間にオリバー家の物語を展開させる、重要な役割が与えられている。

ドッジとイーザは、公にはされない隠された顔を探る“conspirators” (70)として繋がりを強めていく。彼らの共有するおじの歌は、自らの顔を隠さざるを得なかった“statues” (69) 同士、何でも言い合い、自らの秘密の顔を分かち合える同士として、彼らを結びつける。ドッジは同性愛者という“a flickering, mind-divided little snake” (46)としての自己を、そしてイーザは会計簿に模したノートに言葉を隠す詩人としての自己を、ジャイルズによって抑圧されている。そのような抑圧に対するイーザの疑問は、ラ・トロヴのパジェントの決断と重なり、その後の新たな世界への希望へと変化していく。

Well, was it wrong if he [Dodge] was that word? Why judge each other?
Do we know each other? Not here, not now. But somewhere, this cloud,

this crust, this doubt, this dust — She waited for a rhyme, it failed her;
but somewhere surely one sun would shine and all, without a doubt,
would be clear. (39)

ここではなく今でもないが、輝く太陽のもとすべてが明るく表出されるどころかがあるというイーザの予感、その直後に続く、晴れることを信じたラ・トロヴの野外でのパジェントの決行の決断と重なり合い、パジェントの先にある晴れの世界像を物語る。それは、今は隠されている同性愛者を指すあの言葉を発することのできる世界であり、詩人としての彼女が会計簿にしたためていた言葉を発することのできる未来である。

一方、マンレーサの役割は女王として、ジャイルズを英雄に仕立て上げることである。ジャイルズは彼女との出会いにより、“hero” (66) へと姿を変えていく。伝統的職業を継承するという希望も叶わず、自らの望むような人生を歩めないことへのいらだちからジャイルズを解放してくれるものが“action” (61) であり、“monstrous inversion” (61) を表象するヘビを踏みつぶす英雄としての自己であった。マンレーサは女王としてジャイルズの暴力行為を英雄的行為として正当性することで、彼を救い出す。マンレーサはパートから息子へと受け継がれた女王であり、父から息子へと帝国主義的英雄が継承されていくために必要な人物として描かれている。こうして彼は、彼女との接触によって、英雄としての自己を確立し、その姿でイーザと向かい合うのである。

大英帝国の伝統を受け継ぐジャイルズは、マンレーサのみならず、ドッジやイーザにとっても抗い難い魅力をもつ。イーザはジャイルズを前に自らに沸き上がる肉欲を感じるが、新聞が語るように肉欲は兵士による暴行事件を引き起こすものであり、彼女が抵抗すべきものである。対処のために彼女はヘインズを探すのだが、彼女の“inner love” (11) の対象であるヘインズへの思いは単なる恋心というよりも、“outer love” (11) の対象であるジャイルズへの抵抗の意味合いが強い。存在感が希薄で、常に離れたところにおり、灰色の服の男としてしか認識されないヘインズは、彼女の言葉のインスピレーション源として、ジャイルズに対抗するための武器を彼女に与えるための人物として想定されている。³ “It made no difference; his infidelity—but hers did.” (68) という言葉は、イーザのヘインズへの思いがその現状に揺さぶりを与えることを暗示する。彼女に言葉を呼び起こさせるヘインズへの思い

は、ジャイルズに対する対峙し彼との関係性に変化を起こすためのイーザの切り札なのである。

ジャイルズは、拡張する帝国を何世紀にも渡って維持してきた伝統を受け継ぐ者として、イーザと向かい合う。英雄である彼と女王であるマンレーサとの浮気は、既存の夫婦関係にはなんの変化ももたらさない。それに対してイーザは、“healing the rusty fester of the poisoned dart” (123) する言葉をもって、彼と向かい合う。イーザとジャイルズの戦いは、新たな命を創造する。それは、暴力行為から男性を救い出すため、暴力行為を功績とする英雄的価値観に代わる創造性をジャイルズに与えるための、イーザの戦いである。「空襲下で平和に思いを寄せる」で論じられた、“if we are to compensate the young man for the loss of his glory and of his gun, we must give him access to the creative feelings. We must make happiness.” (219) という主張は、平和をもたらす創造的女性としてのイーザの行為に見出すことができる。

暴力からの救済を創作によって行う女性として、イーザはジャイルズを創造的感情へと近づける。二人が抱擁することによって生まれる次世代の物語の第一声は語られないが、『幕間』は、男女の抱擁とそれによる創造、そして平和に到達するために、イーザが変化していく様子を描き出す。それは女性の創造性を、大英帝国の国民を再生産することから、帝国やファシズムの暴力から人々を救済するためのものへと書き替えた、ひとつのモデルを示そうとしたものだ。イーザのための新たなプロットは、暗闇の中から自然発生的に生まれたものである。どこでもないただの土地に、泥の中に沈んだ言葉を養分にして新しい言葉が生まれていく。「クラフトマンシップ」にあるように、言葉は本来自由なものなので、作者は言葉に意味を押し付けたりせず、言葉のなすがままに任せなければならない。そうしてできた物語は、ラ・トローヴの示した文学史に新たな時代を刻み、世界を大戦という暴力から救い、また女性に従来の母とは異なる役割を与える。“To what dark antre of the unvisited earth, or wind-brushed forest, shall we go now?” (33) というおじの歌の示す先には、夜が明け、太陽が輝き、人々がお互いを理解し合い、平和のもとに暮らせる世界が願われているのだ。

註

¹ ウルフと母との関連に関して多く論じられるのは、『灯台へ』(To the Light

House) においてである。この作品のなかでウルフは、強迫観念としてつきまどって来た亡き母ジュリアをラムジー夫人に投影している。

² エドワード朝に大流行した、パーカーが編み出したパジェントは、歴史的建造物のある場所に野外ステージを設置し、多くの素人役者と地元の裏方スタッフとで、数日間かけて行われた。その地方に関する歴史を辿る内容の劇であり、最後の場面でコーラス隊と役者が舞台上に登場し、観客を巻き込みながら行進し、みんなで『神よ、王を護り賜え』(God Save the King) を歌いながら練り歩くというのがお決まりのかたちであった。典型的な愛国心、繰り返される題材、ぎこちのない素人芸などの要素にも関わらず、もしくはそれゆえに、野外劇はイギリスの広い範囲で人気を博した。野外劇は、今でいうところのハリウッド的な、派手で規模の大きい一大スペクタクルだったという。(Esty, 54-61)

³ 幻影としての「灰色の服の男」は『ダロウェイ夫人』(Mrs Dalloway, 1925) にも登場する。セプティマスの従軍時代の上司であったエヴァンズである。セプティマスは妻ルクレツィアと散歩に出かけ、そこで死んだはずの上司の幻影を見る。(A man in grey was actually walking towards them [Septimus and Rezia]. It was Evans! But no mud was on him; no wounds; he was not changed.) (76)

引証資料

- Barrett, Eileen. "Matriarchal Myth on a Patriarchal Stage: Virginia Woolf's between the Acts." *Twentieth Century Literature* 33.1 (Spring, 1987): 18-37.
- Cramer, Patricia. "Virginia Woolf's Matriarchal Family of Origins in Between the Acts." *Twentieth Century Literature* 39.2 (Summer, 1993): 166-84.
- Esty, Jed. *A Shrinking Island: Modernism and National Culture in England*. Princeton, NJ: Princeton UP, 2004.
- Garrity, Jane. *Step-daughters of England: British Women Modernists and the National Imaginary*. Manchester, UK: Manchester UP, 2003.
- Ingman, Heather. *Women's Fiction between the Wars: Mothers, Daughters and Writing*. Edinburgh: Edinburgh UP, 1998.
- Little, Judy. *Comedy and the Woman Writer: Woolf, Spark, and Feminism*. Lincoln: University of Nebraska, 1983.
- Marcus, Jane. *Virginia Woolf and the Languages of Patriarchy*. Bloomington: Indiana UP, 1987.
- Naremore, James. *The World without a Self: Virginia Woolf and the Novel*. New Haven: Yale UP, 1973.
- Woolf, Virginia. *A Room of One's Own / Three Guineas*. London: Penguin, 2000.
- . *Between the Acts*. London: Penguin, 2000.
- . "Craftsmanship." *Selected Essays*. Oxford: Oxford UP, 2009.
- . *Mrs Dalloway*. London: Penguin, 2000.

- . “Poetry, Fiction and the Future.” *Selected Essays*. Oxford: Oxford UP, 2009.
- . “Thoughts on Peace in an Air Raid.” *Selected Essays*. Oxford: Oxford UP, 2009.
- . *To the Lighthouse*. London: Penguin, 2000.
- Zwerdling, Alex. “Between the Acts and the Coming of War.” *NOVEL: A Forum on Fiction*. 10.3 (Spring, 1977): 220-236.

Synopsis

NISHINO Noriko

From the Abortive to the Fertile: Isa's Shift in *Between the Acts*

Virginia Woolf's last novel, *Between the Acts* (1941), has been discussed in the context of feminism, especially since the 1970s. Many feminist critics focused on La Trobe's 'unconventional' pageant and examined the way it resists the patriarchy. While critics discussed female characters such as La Trobe and Lucy Swithin, they paid little attention to Isabella. She has often been seen as a woman who is oppressed by the patriarchal system and restricted to the domestic realm. This paper will give an account of Isabella by re-examining her shift from an 'abortive' poet to a 'fertile' one. At first, I deal with marriage dramas the pageant play provides throughout its main three eras: the Elizabethan age, the Age of Reason and The Victorian age. Then, I shall examine the manner in which her poetic phrases reorder the world. When she is recognised by La Trobe as a female protagonist of a new story at the end of the novel, Isabella stands there to relieve Giles from the violence of the British Empire.

日本英語文化学会会則
(The Japan Society for Culture in English)

- 第1条 本会は日本英語文化学会（The Japan Society for Culture in English）と称し、事務局を担当役員の所属機関に置く。
- 第2条 本会はイギリス・アメリカを始めとする英語圏の文化、文学、言語、言語教育及び関係諸分野の研究をおこない、その成果を発表することを目的とする。
- 第3条 本会は第2条の目的を達成するために次の事業をおこなう。
1. 大会
 2. 研究発表会
 3. 機関誌の発行
 4. その他必要と認められる事業
- 第4条 本会の会員は第2条の主旨に賛同し、入会金、年会費を納入した者とする。会員は次の三種類とする。
1. 一般会員 年会費 5,000 円を納めた者（但し、2012 年度より）。
 2. 賛助会員 本会の主旨に賛同し、これを援助する目的をもって年間 10,000 円以上を納めた個人、または団体。
 3. 学生会員 大学学部、または大学院修士課程在籍者で、入会金 1,000 円、大学生、または大学院生で、年会費 2,000 円を納めた者。なお、年会費を2年間未納のときは、役員会の認定により退会とみなすことがある。また、在外留学1年以上の場合は、その年の年会費を免除する（但し、2012 年度より）。
- 第5条 本会は次の役員を置く。役員の任期は2年とし、兼任及び再任を妨げない。役員に欠員が生じたときは補充し、前任者の残任期間とする。
- | | | |
|---------|-------------|-----------|
| 会長 1 名 | 副会長 1 名 | 理事 10 名程度 |
| 監事長 1 名 | 監事 3 名程度 | |
| 会計 1 名 | 会計監査 2 名 | |
| 編集長 1 名 | 編集委員 10 名程度 | |
1. 会長は本会を代表し、会務を統括する。総会において会員が互選する。
 2. 副会長は本会の会長を補佐し、会長に事故があったときは会長の職務を代行する。会長が推薦して総会で承認を得る。
 3. 理事は役員会において本会の運営について協議し、その意見を具申する。役員会で推薦して総会で承認を得る。

4. 監事長は総会の議長、研究発表会の総合的な司会を務める。役員会で推薦して総会で承認を得る。
5. 監事は総会、研究発表会、その他の会務を執行する。役員会で推薦して総会で承認を得る。
6. 会計は本会の金銭の収支を執行し、総会において収支決算を報告する。役員会で推薦して総会で承認を得る。
7. 会計監査は本会の金銭の収支を監査する。役員会で推薦して総会で承認を得る。
8. 編集長は原稿を収集し本会の機関誌の発行を執行する。役員会で推薦して総会で承認を得る。
9. 編集委員は本会の機関誌の原稿読み合わせをする。役員会で推薦して総会で承認を得る。

第 6 条 本会は顧問をおく。顧問は役員会の推挙により、会長が委嘱し、会長及び役員会の諮問に答える。

第 7 条 本会は次の機関を置く。

1. 事務局
2. 役員会
3. 編集委員会
4. 総会
5. その他必要と認められる機関

第 8 条 総会は本会の最高議決機関であり、毎年 1 回会長が召集する。ただし、会長が必要と認めたととき、臨時総会、役員会、及びその他の会を召集することができる。

第 9 条 役員会は役員をもって構成し、本会の運営にあたる。

第 10 条 編集委員会は編集長及び編集委員を以て構成し、機関誌の発行を執行する。

第 11 条 本会の会計年度は 4 月 1 日より翌年の 3 月 31 日までとする。

第 12 条 本会の会則の改正は総会の承認を経なければならない。

附則 1. 施行細則については別途に定める。

2. 本会は昭和 47 年 4 月上毛英米文学会として発足し、昭和 50 年 4 月 1 日ビビュロス同人会として改組され、平成 4 年 7 月 25 日ビビュロス研究会と名称を変更し、さらに発展させて平成 10 年 4 月 1 日より日本英語文化学会と名称を変更し設立された。
3. この会則は、平成 10 年 4 月 1 日より施行する。
4. この会則は、平成 12 年 4 月 1 日より施行する。
5. この会則は、平成 14 年 9 月 7 日より施行する。
6. この会則は、平成 18 年 9 月 2 日より施行する。

7. この会則は、平成20年9月13日より施行する。

8. この会則は、平成22年9月4日より施行する。

事務局

〒275-8576 千葉県習志野市新栄2-11-1

日本大学生産工学部

教養・基礎科学系言語文化 51号館208 福島研究室

役員一覧

顧問 高山信雄 田中保

会長 福島昇

副会長 市川仁

理事 新井透 石和田昌利 加藤英治 岸山睦 榊原威征
佐久間由彗 鈴木博雄 仁木勝治 原田俊明 町田成男
宮本正和 山岸二郎

監事長 岸山睦

監事 朝川真紀 榊哲 白鳥義博 濱口真木

会計 尾形重政

会計監査 日高正司 三幣友行

編集長 中井延美

編集委員 大野直美 岡崎真美 櫛渕正 佐々木隆 鈴木博雄

中井延美 日中鎮朗 宗形賢二 渡辺宥泰

日本英語文化学会学会賞・新人賞内規

平成 24 年 12 月 22 日制定

平成 24 年 12 月 22 日施行

- 第 1 条 本内規は、日本英語文化学会（以下本学会）が、本会員のより一層の研究・実践活動を奨励し、本学会の質的向上をはかるため、会員の顕著な研究・実践活動等の業績に対し顕彰をおこなうために関わる事項を取り決めたものである。
- 第 2 条 名称は、「日本英語文化学会学会賞」と（以下「本学会学会賞」）「日本英語文化学会新人賞（以下「本学会新人賞」）とする。
- (1) 本学会学会賞
- ・本学会個人会員で、本学会が目指す日本英語文化全般において顕著な学術貢献をした者。
 - ・受賞対象となる業績は、本学会が扱う研究領域に関する実証的・理論的研究を含む学術書、論文を対象とする。
 - ・論文は一連のテーマによる複数編とする。
- (2) 本学会新人賞
- ・本学会個人会員で、本学会が目指す日本英語文化全般において顕著な学術貢献をした者。
 - ・受賞対象となる業績は、本学会が扱う研究領域に関する実証的・理論的研究を含む学術書、論文を対象とする。
 - ・原則として、推薦時に特段の事情のある場合を除いて、40 歳以下の者を対象とする。
 - ・共同研究の場合も、推薦時に特段の事情のある場合を除いて、40 歳以下の者を対象とする。
- (3) 各賞の受賞対象は、前年の 4 月 1 日より 3 月 31 日までに発表されたものとする。
- 第 3 条 本学会学会賞・新人賞の受賞者にはその栄誉を祝し、表彰状を授与する。
- 第 4 条 受賞対象となるものが、他学会等で受賞している場合でも、受賞候補となることができる。
- 第 5 条 共同研究等の場合は、「本学会学会賞・新人賞の受賞対象は本学会会員のみとする。

第6条 本学会学会賞・新人賞選考のため、日本英語文化学会学会賞・新人賞選考委員会（以下「選考委員会」）を設置する。

第7条 選考委員会は、本学会会長、副会長、理事（役員会が3名を推薦する）、顧問（2名）計7名で構成される。

(1) 本学会学会賞・新人賞候補の推薦者（自薦・他薦）は、下記送付物と共に3月末日までに本学会事務局へ申請する。

・推薦書（対象者氏名、所属先名、授賞対象研究名、推薦理由、新人賞にあつては対象者の年齢を明記）

・学会賞・新人賞の対象となっている学術書、論文等

(2) 本学会事務局は、推薦者から申請があつた場合は各選考委員へ資料を送付する。

(3) 選考委員長は選考委員会を開催し選考を行う。

(4) 選考委員長は役員会議で決める。

(5) 選考委員は選考過程及び候補者に関する情報の守秘義務を負う。

(6) 選考委員の任期は2年とし、兼任及び再任を妨げない。

(7) 選考委員会は、受賞対象が各賞の基準に達しないと判断した場合は該当者無しとすることができる。

(8) 選考委員会は、必要に応じて本学会会員中から学術的な意見を聴取することができる。この場合、選考委員会は役員会に対して聴取者の氏名、所属、専門分野等を報告しなければならない。

(9) 本学会事務局は選考委員会の決定を受け、各賞受賞者へ表彰式日時を通知する。

(10) 表彰式は全国大会の総会において行う。

(11) 各賞の募集案内は本学会のHPに記載する。

第8条 選考委員長は、全国大会の総会において選考委員会の報告を行わなければならない。

第9条 本内規の改定は役員会の議を経なければならない。

附則 施行年における選考については、第2条第3項にとられないものとする。

『異文化の諸相』投稿規定

1. 投稿論文は、未発表のものであり、日本英語文化学会の機関誌にふさわしい内容のものであること。ただし、すでに口頭で発表し、その旨を明記している場合は、査読の対象となりうる。投稿論文には Synopsis (300語以内) をつけること。なお、英文原稿と Synopsis についてはネイティヴ・スピーカーのチェックを受けること。
2. 応募は日本英語文化学会会員に限る。
3. 論文は次の長さとする。
 - (1) 和文の場合：A4 の用紙。引証資料は含めず 15 枚以内。横書き、1 枚は 40 字 × 25 行 (15,000 字)。MS 明朝体使用 (11 point)。上下左右余白 30 ミリ。
 - (2) 英文の場合：A4 の用紙。引証資料は含めず 15 枚以内。横書き、1 枚は 25 行。Century 使用 (11 point)。上下左右余白 30 ミリ。
4. 論文は、氏名・連絡先住所・電話番号・メールアドレスを明記した表紙をつけて、3 部 (コピー可) 提出すること。また、掲載決定の場合、氏名・論文タイトルを明記した CD-ROM 等の記憶媒体を提出すること。なお提出論文と記憶媒体は返却しない。
5. 書式上の注意
 - (1) 本文から独立した引用は、和文の場合は 1 字、英文の場合は 3 ストローク下げて書き、前後を 1 行ずつあけること。
 - (2) 注および引証資料リストは、原稿の末尾にまとめてつける。
 - (3) その他の書式の細部については、*The MLA Handbook for Writers of Research Papers*, 6th ed. (邦訳『MLA 英語論文の手引』第 6 版、北星堂) に従う。英語学・言語学関係の論文は、LSA のスタイルに従う。
6. 投稿論文の採否及び掲載時期は、匿名の査読者による審査の上、編集委員会が決定する。採択されても、編集委員会の決定によって、書き直しを求めることがある。
7. 校正は二校までとする。校正における訂正加筆は、必ず文字上の誤りに関するもののみとし、内容に関する訂正加筆は認めない。
8. 原稿提出締切日：10 月 4 日 (必着)
9. 原稿提出先：日本英語文化学会編集長

「会報」(NEWSLETTER) 投稿規定

1. 研究ノート 和文 2000 字、欧文 800 語程度
2. 書評 和文 2000 字、欧文 800 語程度
3. その他 和文 2000 字、欧文 800 語程度
4. 応募締切 5 月 16 日
5. 応募先 日本英語文化学会会報編集部編集長 <jesse@parkcity.ne.jp>
6. 応募方法 メール (WORD 形式の添付ファイル)
7. 掲載の採否については編集部に一任とする。

編集後記

『異文化の諸相』第34号をお届けいたします。

今回は英語教育関係が1編、文学関係が3編の論文が採用されました。ちょうど学会の記念論文集の発行とも重なったこともあって、投稿論文数が少なくなりましたが、致し方ないかと思えます。次号ではいわゆる英語文化面からの投稿も含めて、多くの会員からの投稿を期待したいと思います。

お忙しい中、時間を割いて査読にあたっていただいた先生方には心より感謝申し上げます。

2013年12月20日

日本英語文化学会
編集長 市川 仁

執筆者一覧

中井 延美 (明海大学)
亦部 美希 (日本大学)
伊藤 佐智子 (日本大学・院生)
西野 方子 (東京大学・院生)

ISSN 1346-0439

異文化の諸相 第34号

2013年12月25日発行

発行者 日本英語文化学会

〒275-8576 千葉県習志野市新栄2-11-1

日本大学生産工学部
教養・基礎科学系言語文化
51号館208 福島研究室

代表者 福島 昇

発行所 有限会社 オメガ印刷

〒160-0007 東京都新宿区荒木町5-14 ネオ荒木町ビル1F

電話 03-5367-8503

